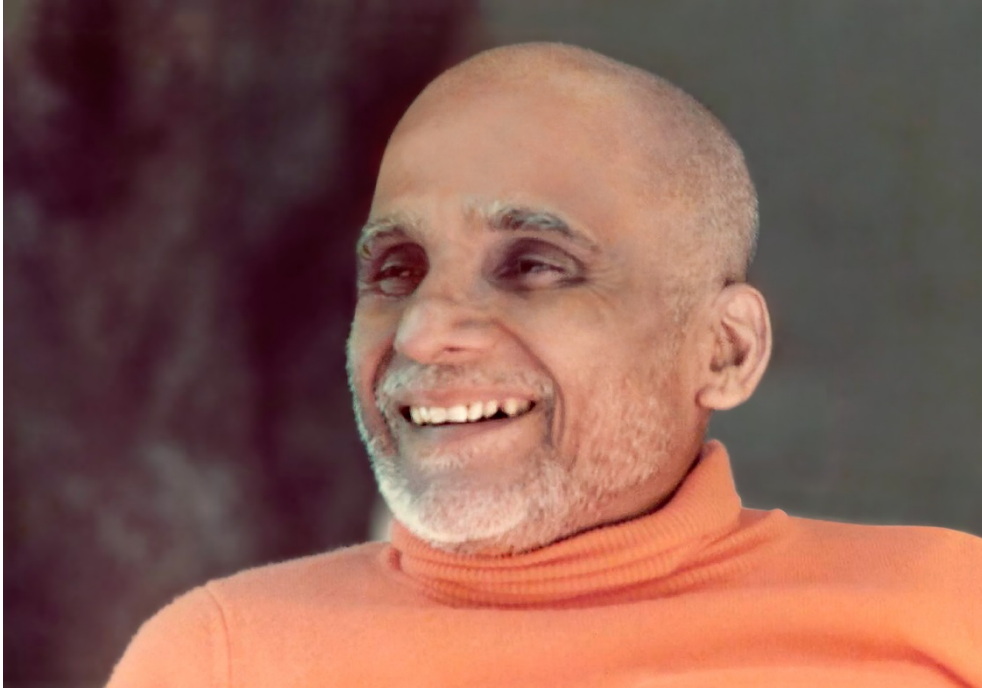


# 霊的修行の困難

---

The Problems of Spiritual Life

2019/11/23 版



スワミ・クリシュナンダ 著

The Divine Life Society

Sivananda Ashram, Rishikesh, India

ウェブサイト： <http://www.swami-krishnananda.org>

書籍： <https://yogajbooks.wordpress.com/>

## 目次

まえがき	3
1990年12月10日	4
1990年12月11日午前	6
1990年12月11日午後	15
1990年12月12日午前	27
1990年12月12日午後	40
1990年12月13日午前	42
1990年12月13日午後	55
1990年12月14日午前	69
1990年12月14日午後	76
1990年12月15日	78
1990年12月16日	88
1990年12月17日	96

## まえがき

本書はスワミ・クリシュナナンダと、カナダ人弁護士のラリー・クラウス氏とその妻サラ・クラウス氏との会話を書き起こした書 “The problems of Spiritual Life”の邦訳です。

1990年12月10日

ラリー： 個人意識とは何ですか。

スワミジ： 個人意識？そのようなものは存在しない。意識は一つであり、その意識があらゆる所に存在している。その意識が特定の時空間的状况の中に位置しているように見えるとき、それを個人、個体と呼ぶのだ。言うなれば、それはコップの中の空間のようなものだ。空間というものをコップの中に閉じこめて限定することはできないが、私たちにはコップの中に小さな空間が閉じこめられているように見える。

同じように、本来は大きい意識が小さく制限されているかのように見えるのが意識の個性性だ。意識が本当に個体になることはない。意識は常に普遍的なのだが、どういうわけか私たちは、例えばコップのように、意識が存在している場所があると考えため、意識にある種の制限を課しているのだ。実際には、意識は特定の場所に閉じこめられておらず、閉じこめることなどできない。

ラリー： 意識が特定の場所に閉じこめられているように見えるだけなのですね。

スワミジ： その通り。閉じこめられているように見えるだけだ。

ラリー： 実に多くの物の中に意識が閉じこめられているように見えますが、なぜこのようなことが起きたのですか。

スワミジ： そのような世界を作った人に質問するとよい。私の責任ではないので、私に聞くべきではない。

ラリー： スワミジも意識ですから責任があるのではないですか。

スワミジ： 私はそのような違いを生じさせていないし、そもそも私にはそのような違いは見えない。だから私が目にするのできないものに関する質問に答えることはできない。あなたは私には見えないものを見ているのだ。水の入ったコップ中で、まっすぐの棒が曲がって見えるようなものだ。誰が棒を曲げたのかとあなたは質問している。どう答えると言うのだね。棒が曲がった責任は誰にあるのか。まっすぐの鉛筆を水の入ったコップに入れると曲がったように見える。いったい誰にその責任があるのか。

ラリー： 普遍的意識の責任です。

スワミジ： 普遍的意識の責任でも誰の責任でもない。あなたの目が正しく見ていないだけだ。普遍的意識の責任ではない。普遍的意識が鉛筆を曲げているのではない。それを見ているあなたの目の構造の問題だ。

ラリー： しかし、普遍の…

スワミジ： 普遍的存在とは誰のことだね。あなた自身が普遍的存在だ。なぜ普遍的存在を持ち出すのかね。あなたは、あなた自身が普遍的存在なのに、まるでそれがあなたの外にあるかのように話している。普遍的存在の外にいることなどできないのだ。

ラリー： どういうわけか、私の意識は制限されているからです。閉じこめられています。

スワミジ： 実際には制限などされていない。そのような考えは捨てなくてはならない。無意味な考えを頭に詰め込んでしまっているだけだ。意識を制限することはできないと言ったが、それは、制限されているという意識自体が、意識が制限されていないことを示唆するため、意識が制限されるということはあるえないのだ。制限を超えたから制限を意識できるのだ。論理的に考えなくてはいけない。制限を超えなければ、自分が制限されているということを意識することはできない。

ラリー： 自分が制限された存在であると気づくことで、その制限を超えるのですか。

スワミジ： 制限を超えない限り、自分が制限された存在であるとは知ることができない。受刑者が有機的に刑務所の一部だとしたら、受刑者は自分が囚われの身であることを知ることができない。受刑者にも自由の意識がある。刑務所の外に何かがあるという意識があるゆえに自由を求めるのだ。

ラリー： 受刑者は刑務所の外に何かがあることを知っていますが、受刑者自身は刑務所に閉じこめられています。

スワミジ： しかし受刑者は、囚われの身ではない自分についても知っている。そうでなければ、刑務所の外に出るという考えは心に浮かばない。受刑者の本質が刑務所の外にあるという可能性があるのだ。

ラリー： そうですね。その可能性はあります。

1990年12月11日午前

ラリー： 善そして悪とは何ですか。

スワミジ： あなたはどう考えているのだね。あなたは善と悪をどのように理解しているのかね。あなたにとって善と悪とは何なのか。

ラリー： 私の理解は、この世界での私たちの経験はすべて神の現れですが、私たちは神から分離した存在として自分を経験しています。自分が個人だと感じており、その結果、私たちには好き嫌いの感情があります。嫌悪という正反対のものを経験します。しかし結局、善も悪もすべて神の現れですから、そういう意味で両者は同じものだと私は理解しています。

スワミジ： 善と悪が同じだと言うのかね。なぜ善と悪が同じだと言えるのだね。

ラリー： 善と悪が同じだというのは、私たちの経験はすべて神から来るものであり、すべては神の世界が展開しているものだという意味です。

スワミジ： すべての経験が神から来るものだとすれば、どのようにして善と悪を区別するのだね。

ラリー： ユダヤ教ではトーラーの教えを参考にします。

スワミジ： 今はトーラーのことは忘れなさい。あなたはどのように善と悪の選択をするのかね。

ラリー： 私がですか。それともユダヤ教を信仰する者がどのように選択するかという質問ですか。

スワミジ： ユダヤ教ではなく、あなた自身の考えだ。あなた自身はどう考えるのかね。もしすべてが神から来ているのであれば、両者はまったく同じということになる。二つが同一であれば選択というものはありません。

ラリー： 私たちには物事に対する直感的な反応があります。正しくないと思うものを目にするとき…

スワミジ： なぜ正しくないものと言うのかね。すべては神から来ると言う主張に矛盾している。

ラリー： はい。しかし、二つのものが神によってもたらされます。私個人の受け取り方と言われても、どのように答えてよいか…

スワミジ： あなたは善悪という見解の外にいることはできない。

ラリー： ユダヤ教徒としての善悪の考え方を聞かれたので…

スワミジ： あなたの考え方はユダヤ教の考え方とは異なるのかね。

ラリー： はい。

スワミジ： それなら、どうしてユダヤ教の哲学を学んだのかね。自分に関係のないことを勉強するために無駄に労力を費やしている。

ラリー： 理由はともかく、私はユダヤ教に関係してきました。

スワミジ： 学問的な研鑽を積むのはよい。そのような研究に問題はない。しかし、あなた自身の結論はどのようなものだね。それが私の質問だ。

ラリー： まだ結論に至っていません。

スワミジ： 私の質問はシンプルだ。善と悪の両方が神によってもたらされるというのは真実なのか、それともあなたの言っていることは間違っているのか。

ラリー： 善と悪の両方が神によってもたらされるのか。私はそう思います。

スワミジ： 神が悪を創造するのかね。

ラリー： 私にとって悪だと思えるような状況を神は作ります。

スワミジ： あなたは弁護士だから弁護士のような話し方をする。なんとかして悪を作っているという非難から神を守ろうとしている。(笑)

ラリー： 私には悪と見えても、神が完全無欠ならば…

スワミジ： あなたは神を依頼人として弁護をしているのだね。神が困った状態に追いやられないようにと。

ラリー： そうかもしれません。だとしたら、弁護士料はどこに請求すればよいのでしょうか。

スワミジ： 神からいくら貰っているのだね。

ラリー： 日々の存在が報酬です。

スワミジ： あなたの言っていることは正しい。善と悪と呼んでいる二つの力は一つの根源から生じるものだ。たとえば昼と夜のように。昼と夜が二つの異なるものだとは言えない。一つのものが二つの顔を持っているだけだ。昼をこちらに置いておき、夜を別の場所に置いておくという事はできない。一つの現象が昼に見えたり夜に見えたりするだけだからだ。

誰が昼を作り、誰が夜を作っているのか。太陽が夜の原因だと言えるだろうか。太陽が昼の原因であれば、夜の原因も太陽だと言えるかもしれない。太陽に関連した現象として夜が生じるのだから。しかし、太陽がそこに鎮座していて夜を作っているとは言えない。昼と夜は、一方では暗い夜に見え一方では明るい昼に見える、特定の状況の自発的な相関物だ。

神の国に善悪は存在しない。善悪が存在するのはずっと低い次元の世界であり、善悪の概念には知覚の二元性が関係している。神は一つの目で見ると、私たちは二つの目で見ると。神の視野は統合的だが倫理的使命、宗教や道徳が要求する、すべきこととしてはいけないことは、一つの現象を二つのものとして知覚することから生じる。

私たちは昼と夜があると言うが、私は一方に昼がありもう一方に夜があるのではないと言いたい。昼という側面と夜という側面を持つ何かは起きているだけだ。何かは善で何かは悪だと人は言う。子供のように、昼は良くて夜は良くないと言う。そのように言うのは構わないが、夜が悪くて昼が良いというのは真実ではない。夜が悪だと言えるだろうか。夜がなくなり昼が永遠に続いたらどうなるのか。それでもよいだろうか。夜がなくなれば私たちは滅びてしまう。昼がなく夜だけしかなかった場合も私たちは生きるこ



とができない。二つの側面が合わさって二元的に見える経験という現象が起こるのだが、その本質は統合的で完全なものだ。

意識に… 弁護士さん、よく聞きなさい。意識を主体と客体に二分し、一方をもう一方以上に強調するような意識への影響は、倫理的な言葉を使うならば、正しくないものと言える。主体と客体両者の間で働く統合的な現象を見ることに資するような意識への影響は善であり、正しいと言える。

私が見るあなたとき、AがBを、BがAを見ているように見える。これがいわゆる二元的知覚と呼ばれるものだ。しかし、そこには私たちが気づいていないもう一つの要素がある。私が見るあなたを、あなたが私を見ているのも、あなたの行為でも私の行為でもない。私が見るあなたを、あなたが私を見ているのでもなければ、あなたが私を見ているのでもないのだ。知覚するものと知覚されるものの中であって両者のバランスをとり、両者を見つめている意識があるのだ。だから、あなたと私が同時にお互いを知ることが可能なのだ。主体が客体を知る、あるいは客体は主体を知るという二元的知覚と呼ばれるものは、両者の間で働く超越的意識によって生じる現象だ。しかし、どちらか一方の側を強調するものは正しい知覚とは言えない。

「罪」や「悪」、「邪悪」などの不快な言葉を用いる必要はない。適切な知覚と適切ではない知覚があると言えるだけだ。主体と客体をつなげる統合的な知覚をする意識になることに資するものは正しく、そのような意識の動きの妨げとなるものは正しくないと言える。幻想のためにそのような質問が出てくるのだ。神は悪を作らず、幻想も作らない。目の構造によって知覚が影響を受けるようなものだ。先ほどのコップの水に入れた鉛筆が曲がって見えるという例のように。

ラリー： しかし、そのような目を作ったのは神です。

スワミジ： 神は何も作ってはいない。神は神の外に何も作りはしない。

ラリー： そうは言っても、私の目はそのような見方しかできません。

スワミジ： それは意識が発作によって麻痺しているような状態なのだ。意識の一部が全体から切り離されることによって、これらの問題が生じる。

ラリー： なぜそのような必要があったのですか。

スワミジ： そのような必要はなかったし、最終的にそのようなことは起きていない。起きていないのだ。いずれ、すべては幻想であり、そのようなことは何も起きていないことに気づくときが来る。その時はじめて、この疑問に対する答えを得ることができるのだ。あなたは夢の中で「なぜ目覚めなくてはいけないのか」と質問しているようなものだ。夢を見ている間は目覚めた世界というものは存在しない。夢から目覚めてはじめて夢だったと知るだけだ。そして目覚めについての質問はしなくなる。

束縛された意識が、なぜ束縛されているのかを知ることはできない。なぜ束縛されているのかを知るときには、すでに束縛されていないからだ。それは懐中電灯を使って暗闇を見ようとするようなものだ。暗闇を探すときに、懐中電灯を照らして探すだろうか。光があるとき、そこに闇はない。知識の光は疑問自体を消し去るために、疑問に対する答えを得ることができないのだ。疑問という闇に知識の光を当てた途端、疑問は消滅する。

こんな話がある。夜が神のところに行き「どこに行っても太陽が追いかけてくるので、居場所がありません」と泣きついた。創造主のブラフマー神は太陽を呼び、「なぜ夜を追いかけるのだね」と聞いた。すると太陽は「夜など見たこともありません。見たこともないものを、どのようにして追いかけることができますでしょうか。無用な苦情です」と言うのだ。神はなぜこの世界を創造したのかという質問は、これと同様の質問だ。

あなたは神がこの世界をつくったと決めつけて、無意味に答えを求めているが、それは太陽が暗闇を追いかけているのと同様だ。暗闇は存在しないのだ。太陽は「暗闇を追いかけるなどという間違いは犯していない。暗闇など見たことがないのだから。なぜそのような文句を言うのですか」と言うしかなかった。

このように、真の知識はそのような疑問は存在しないとい言うので、無知を知識で解決しようとしても無駄だ。真の知識が無知に直面するとき無知は消滅する。これは知識によってあなたの疑問に対する答えを得ることができないことを意味する。無知の疑問は無知によって答えるしかないのだ。正しい知識が見当違いの質問に対して答えることはできない。

ラリー： 世界は存在しないとされているのですか。

スワミジ： その通り。最終的に世界は存在しない。もうそれで質問はないだろう。(笑)

ラリー： 世界が存在していないのであれば、話す相手がいませんからね。(笑)

スワミジ： 自己を深く知る必要がある。あなたの疑問に対する答えはあなた自身であるため、自己を深く瞑想する必要があるのだ。あなた自身が答えなのだ。すべての答えはあなたの自己の本質、つまり、あまねく存在する無辺の大海から得られるのだ。深い瞑想の実践が必要だ。あなたを、あなたとあなたの見ているもの、あなたとあなたが考えているものとの間に置いてみるのだ。

自己を深く瞑想するのだ。よく聞きなさい。私たちは常に二元的な思考をしている。あなたは考える人であり、そこには考えていることがある。思考者と思考対象がある。しかしあなたは、あなた自身のことを考えるべきでも、心に浮かぶ思考の対象を考えるべきでもない。あなたとあなたの思考対象の間にあるもの、そこにあなたの意識を置くのだ。あなたの意識を両者の間に置くことができるかね。

あなたの意識は今あなたの体の中にあり、その働きは体を介しているため、あなたは目で私を知覚している。体に縛り付けられている意識を解き放ち、意識を思考と思考対象の間に置くように瞑想するのだ。

ラリー： 体の外に置くのですか。

スワミジ： そうだ。そして両者を見るのだ。クラウド氏として見るのではなく、両者の間に在る何かとして一方にクラウドを、もう一方にクリシュナンダを見るのだ。そのときあなたは全く別人だ。一瞬にしてあなたは超人となる。今のあなたは目を通して、体を介して自分の外にある物を見ているため、人だ。それが人の思考だ。超人の思考は主体と客体のどちら側にも偏らず、両者を超え、そしてまた内在的である。超人が主体と客体の間にあり両者を超越するものとして思考するのに対し、人の思考は一方の側に偏り、知覚対象から切り離されている。私たちは人としてではなく、超人の思考をできるよう努力しなくてはならない。

人間が人間の疑問に答えることはできない。人間の疑問に答えられる人間はいないのだ。そして誰もが同じ人間であるということに変わりはない。しかし、人間には人間の思考を超える超人的な要素がある。それは知覚するものと知覚されるものを超えるものである。サーカスの曲芸のごとく難しく、あなたの意識の中で行わなければならない離れ業だ。通常の思考とは異なるが、偏見を無くし心の平安を得るためには、とても重要なことだ。さもないと、私たちのバランスは常に一方の側に偏り安定することはない。

ラリー： しかし、そのような状態に自分を置こうとすると…

スワミジ： その時、あなたも世界もなくなる。あなたは両者をつなげる何かを体験するのだ。それはほとんど神の目で見ると等しく、そのような考え方ができたならば、あなたは神の膝の上にいるようなものだ。神は主体と客体の平衡である。それが神であり、神は意識以外に他ならない。だから、あなたの意識を主体と客体の間にあるものとして働かせることができたなら、あなたは神の膝の上にいるのだ。それはほとんど神の思考と言えるものであり、その時あなたは人ではなくなる。

今話している思考を実践することができたなら、高度な集中力と思いをもって数分でも継続的に実践することができたなら、あなたの中に途方もないバイブレーションが起こるだろう。そして、あなたは少し前のあなたではなくなるのだ。あなたは肉体的、精神的、そして社会的にさえも活性化され、それまでとは別人になる。周りの人たちもあなたに「何か」を感じるようになる。あなたの顔を見て、人ではない「何か」を感じるのだ。人の姿をした何か別のものを。

このような話をしているのは瞑想を実践する必要性を伝えたいからだ。それほど書物を読んだり議論したりする必要などない。簡単なことだ。論より証拠。プリンの出来は食べてみないと分からない。自分で食べることなくプリンについて延々と討論しても始まらない。だから日々の瞑想を実践し、このような思考が習慣となるまで、このような思考でのみ考えるよう努力しなさい。

私生活でも社会生活でも、弁護士としても、このような思考をするのだ。これがあなたの新しい思考だ。主体と客体に二分され、どちらかの側につくことを余儀なくされるこれまでの思考をやめるのだ。通常思考は主観か客観に偏り、バランスを保つことが非常に難しい。心は私たちの体に閉じこめられる傾向があり、他のものに対して好き嫌いや、愛着と嫌悪を持つという習性を持っているために、今話したような考え方をすることが非常に難しいのだ。

それはある種の病気だと言える。体の中に閉じこめられた意識は病気の状態なのだ。病気がゆえに苦しんでおり、またその思考は不健全な思考だ。自然で健全な思考ではないのだ。よって私たちは幸せではなく、他の人を幸せにすることもできない。体を介することなく、体に縛られない思考をできるように、今までとは異なる思考モデルに基づく価値観の完全なる転換が必要だ。

パタンジャリのヨーガ・スートラに、あまりその意味が理解されていないスートラ（金言）がある。誰もそのスートラの意味を理解していない。「偉大なる意識とは体の外にあるものである」というのがそのスートラの訳だ。このスートラでパタンジャリが「外」

と言うのは、「体による束縛を受けていないもの」という意味であり、私が今話したことと同じことを意味している。あなた… あなたとは意識のことだが、このクラウドさんの意識は体と呼ばれるものの中にある。その意識を体から出して、このカーペットの上に座らせみなさい。そうするとあなた自身がその意識の対象となり、体への執着は消え去る。

今のあなたは、自分が肉体を持つ主体だと考えており、自分の体のことしか考えられないほどに意識は体にしがみついている。体を持つ主体だとあなたが考えているものを客体にするのだ。そうすれば、ここに座っている他の人たちとの間に距離があるように、自分に対しても客観的になる。あなたは、外から自分を見ている別のものとなるからだ。その時あなたは他人を見るのと同じように自分を見ているのだ。

あなたは、ここに座っている人たちの運命のことを気にかけていない。そして今話しているような思考をするとき、あなたは、あなた自身についても同様に気にかけなくなる。あなたは今のあなたではなくなるからだ。あなたは、他の人たちと同じように客体なのだ。なぜ自分は主体だと思うのか。そこが核心であり、それが間違いなのだ。パタンジャリのスートラで書かれているような方法で凝念することでのみ、このような思考が可能となる。つまり自己を体の外、主体と客体の間にあり、両者を超越すると同時に両者に内在する、体より大きな存在に移すのだ。そのときあなたは神人となる。そのときあなたは人ではなくなる。普通の人間ではない何かになるのだ。

ラリー： 私たちの人格に意味はないのでしょうか。

スワミジ： 左右の腕が同じ体の一部であるように、私たちの人格は、私たちの人格とその他の人格の両方を包含するものの一部だ。左手と右手の関係について心配する必要はない。左手も、右手を包含する同一の体の一部なのだから。主体は客体が属しているものと同じものに属している。それが今私が話しているものであり、真のあなたなのだ。だから何も心配する必要はない。

ラリー： しかし、そもそもなぜ個人の人格というものが必要だったのかという疑問が残ります。

スワミジ： なぜこのようなことが起きたのかという質問だが、その答えはあなたがこの体を超越したときに得られる。体を超越するとき、あなたはこの質問に対する答えを知ることになる。先ほど言ったように、無知の闇に光りを当てようとしているのだ。知識によって無知を理解することはできない。両者は相容れない。質問は無知の一部だが、

あなたが求めている答えは知識に属するものである。両者は相容れないものであり、互いが他方を知ることはできない。

目が覚めた状態で夢を見ることはできないし、夢の中で目が覚めた状態を知ることもできない。両者が同時に存在することはできないのだ。したがって、理論上の質問は役に立たない。答えは瞑想によって得られる。正しく凝念することができれば、太陽が霧を消し去るように問題は一瞬にしてなくなる。質問する必要はない。問題は自ずと解決する。

**サラ：** 私たちが体を持って経験する苦悩や個人的成長から得る知恵にはどのような価値があるのでしょうか。それらに意味はないのでしょうか。

**スワミジ：** もちろん価値はある。そのような経験がなければ、あなたは今のような考えはしていなかっただろう。進化の過程によって、低い段階からより高い段階へと徐々にあなたの理解が深まっていったのだ。そしてあなたは今人間の段階にいる。私が今話しているのは、人間の段階を超えるものについてだ。

**サラ：** 体がないと人間のレベルに到達できないのですか。

**スワミジ：** あなたはすでに人間の段階に到達しており、人間の心で思考している。しかし、神の思考ができるようにならねばならないという話をしている。人間の思考よりも高度な神の思考という段階があるのだ。私たちはまだそのような段階には到達していない。今の私たちは人間の思考しかできないが、人間の思考ではない超人の思考というものがあるのだ。もちろんあなたの言うとおりに、私たちは体を通して今の段階へと進化してきた。鉱物から植物、植物から動物、動物から人、人から神へ、それが進化だ。

**サラ：** 神のような思考は瞑想や熟考によってのみ可能となるのですね。

**スワミジ：** 瞑想。その通りだ。

1990年12月11日午後

スワミジ： どうだね。

ラリー： 私の心と私の自我は、絶対的存在の<sup>なるもの</sup>「私」との関係を知りたがっています。

スワミジ： 絶対的存在に<sup>なるもの</sup>「私」はない。

ラリー： 「私」…

スワミジ： 「私」というものはない。

ラリー： 分かりました。絶対的存在だけです。では、心と絶対的存在との関係は何ですか。

スワミジ： 心は絶対的存在が時空間に投射されたものだ。時空間に投射されたもの、あるいは屈折したものと言ってもよい。鏡そのものに輝きがないように「心」というものは実際には存在しない。鏡は光が当たったときにだけ輝く。鏡が放つ光が心であり、鏡に頼らない光そのものが絶対的存在だ。その関係はシンプルだ。絶対的存在が時空間という鏡を介して輝いており、心という独立したものがあるわけではない。鏡そのものの光というものがいないのと同じだ。

鏡が単独で輝くことはできず、同様に心が思考することもできない。絶対的存在の光が時空間を通して照らされているために、心が思考しているように見えるだけだ。よって、時空間は鏡のようなものであり、心は鏡が反射する光のようなもの、そして絶対的存在は鏡に当たる光そのものだ。

ラリー： 心は絶対的存在の反映だということですか。

スワミジ： その通り。あなたが思考するのは、絶対的存在によって心で光が反射しているからだ。

ラリー： 同様に、他の人々すべての心が絶対的存在を反映したものなのですね。

スワミジ： 誰の心もそうだ。皆一様に同じだ。

ラリー： 答えはないかもしれませんが… ならば、なぜ絶対的存在は、そのような選択を…

スワミジ： 絶対的存在はいかなる選択もしない。あなたが、なぜかと質問するなら、私は、そのようなことを絶対的存在はしていないし、最終的にはあなたも存在していないと答える。あなたは自分が存在しているという幻想を抱いているのだ。これが疑問を一刀両断する真理だ。質問は「原因」と「結果」の関係性から生じるものであるため、「なぜ」という質問をしても無意味なのだ。結果に対する原因を知ろうとするから質問が生じるのだが、誰がすべての結果に原因があると言ったのかね。それはあなたの空想でしかなく、架空の質問に対して理性的に答えることはできない。

誤った認識に基づく質問でしかなく、見当違いの質問に対する正しい答えはない。最終的には起きていないことだから、質問は無意味だ。しかし、あなたはそれが起きたと考えている。よって、起きたことに見合った答えがあるはずだと考えるのだ。必要とされるのは精神分析療法と呼ばれるものだ。思考自体に何か問題があるのだ。あなたに何か起きたのだが、何が起きたのかは、起きたことが正されたら理解できるようになる。

ラリー： もし何も起きていないのであれば、私の心も存在しておらず、そしてまた、スワミジも私も存在していないということですか。

スワミジ： 何も存在していない。自分もまた存在していないのだと確信できれば、何の問題もない。しかし、あなたは自分が存在していないと信じることができない。よって、これらの質問が生じる。自分の存在の意識をなくしたらどうなるか試してみなさい。その時あなたは絶対的存在に溶け去る。そして、その後何も質問をしなくなるだろう。しかし、あなたは自分が存在しているという意識に固執しているために、超えなければならぬ障害として疑問が生じる。

自分が存在しているという固執は、言い換えれば絶対的存在からの独立に固執しているということだ。ここに問題の核心がある。クラウドさんではなく、絶対的存在に思考をさせるのだ。体あるいは人格を通して考えるのではなく、自分の意識を普遍的な意識に移すという実践について午前中に話した。私たちの思考はすべて絶対的存在から切り離されたものであり、そのために答えを得ることができないのだ。

ラリー： スワミジは自分を超越されていて…



スワミジ： 私には疑問や質問は一切ない。そして誰かに会いたいとも思わない。誰かと話さなくとも完全に満足している。重要人物であろうとなかろうと、誰にも会う必要を感じない。誰からも何も求めている。しかし不思議なことに満ち足りている。スワミ・シバナンダの恩寵だ。

ラリー： スワミジは存在しているのですか。

スワミジ： 私は絶対的<sup>なるもの</sup>存在として存在している。それ以外の存在のしかたは誤りであり、誤りは出来るだけ早く正さなくてはならない。あなたは自己の存在の普遍性を常に考えていなくてはならない。あなたは存在している。誰もあなたが存在していないと言っているのではなく、あなたが考えているような存在とは異なるということだ。あなたは存在しているが、あなたが考えているような存在のしかたではない。

ラリー： 私たちは皆存在していますか。

スワミジ： 常に存在している。

ラリー： ここに座っている私たち皆が存在していますか。

スワミジ： 「私たち皆」というものはない。大海が多くの水滴を含んでいるようなものだ。海全体が水滴の集まりでしかないと言うのであれば、「私たち皆」と言うのもよいが、実際には海に多くの水滴はない。それは理論上の概念だ。海は一つの塊だが、個別の水滴という観点で議論ができるだけだ。よって「私たち皆」というものなどない。概念上私たちは海の水滴のようなものだと言えるだけだ。

ラリー： 絶対的存在が一つであるなら、なぜ複数の意識があるのですか。

スワミジ： すでに言ったように、夢を見るようなものだ。何かが起こったのだ。夢の中で見る山は外界に存在しているように見えるが、実際にはあなたの頭の中にあるだけで、本当は存在していない。一つの普遍的意識がどういうわけか体に宿り、すでに述べたように時空に投射されたものとして、言わば夢を見ているのだ。すべては「言わば」であり、本当には起きていない。あなたの脳が実際に夢の中で山を作り出しているわけではないが、あなたには山が自分の外にあるように見える。あなたの心の産物である夢の世界の山が、夢の中では自分の外に在ると見えるように、この世界も私たちの外に存在しているように見えるのだ。

ラリー：すると、世界は私の心の中に在るのですか、それとも絶対的存在の中に在るのですか。

スワミジ：あなたの心とそれを分けることはできない。それを宇宙心と呼んでもよいだろう。二つを分けることはできない。

ラリー：私がスワミジと話をするとき…

スワミジ：大海のなかで、海水の一滴が別の一滴と話をしているのだ。

ラリー：では、単なる私の夢ではないということですか。

スワミジ：自分が一滴の海水だと考え、大海から分離しているとき、それは夢だ。夢とは海水一滴が大海から分離しているという確信に他ならない。しかし、一滴の海水が、一滴の海水などというものはなく、大海が一滴の海水のように見えているだけだと知るとき、あなたは夢から覚めている。海は多くの海水の滴しずくが集まったものだと言える。しかし海は滴の集まりではなく、一つの塊だ。どちらの見方をすることもできる。

サラ：絶対的存在を大海にたとえる話はよく理解できます。しかし、この世界が夢でしかないと言っても、この世界の中で実に多くのことが起きています。多くの経験があり、進化があり…

スワミジ：経験はすべて夢の中で起きているだけだ。夢の外の出来事ではない。夢の中でも空腹や喉の渇きを感じることができるし、死ぬことも可能だ。しかし実際には何も起きていない。私たちは夢の中で木から落ちて足を折ったり、結婚して子供を産んだり、貧困を経験したり、あるいは死んだりすることもある。これらすべては夢の中で起こり得ることだ。しかし、目を覚ますと何も起きていないことを知る。

サラ：実体がないものなのですか。

スワミジ：その通り。夢の中の出来事に実体はない。

サラ：この世界で起きていることすべてに、全く実体がないのですか…

スワミジ：全くない。最終的には実体のないものだ。この世界は意識が転変したものでしかない。

ラリー： 絶対的存在が夢を見るという選択をしているのですか。

スワミジ： あなたは同じ質問を繰り返している。絶対的存在が何かをしているのかという質問と同じだが、そのような質問をしても意味はない。絶対が何かを選択することはない。ただ存在している。あなたは、なぜこのようなことが起きているのかと何度も繰り返し質問しているが、その答えを得ることはできない。それに没入して悟るしかないのだ。有限の存在が無限の存在に関する質問に答えることはできない。あなたは有限に没入し、そしてそこから無限に没入する必要がある。そうすれば答えを得られるだろう。

ラリー： 一生の間に無限に没入することは可能ですか。

スワミジ： 心から切望していれば可能だ。実際のところ、本当にそれを切望しているのであれば、あなたはそれに没入し、明けても暮れてもその状態から抜け出すことはないだろう。

サラ： どのようにして夢の中で、心や浄化の技法といった道具を使うことができるのでしょうか。

スワミジ： すべては心の一部でしかない。夢の世界で異なる技法を使うとき、それらが皆異なるものだと思うかね。夢の中で水の入った水差しを運んだ場合、水差しも水も心の一部だ。実体はない。同じことが目が覚めている状態についても言える。あなたが目にする容器や道具のすべては宇宙心でできている。固い物質に見えるかもしれないが本当はそうではない。夢の中では王も乞食も同じもので作られている。

サラ： では、どのようにして夢の中のものを使って絶対的存在の意識に到達することができるのですか。

スワミジ： 私たちは、私たちと外の環境との間に調和をもたらすために様々な方法を用いる。環境とは外の世界ことだ。道具とは、私たちと外の世界との間に調和をもたらすためのものでしかない。あなたはその目的のために様々な道具を使う。この世界から受ける影響のために私たちは毎日空腹を感じるので、私たちは食べ物という道具を使う。冬の寒さが来たときには毛布という道具を使う。これらの方法によって、私たちは私たちと自然との間に調和を保っているのだ。同様に、私たちはこの世界のものすべてと様々な方法によって調和を取らなければならない。心理学的、肉体的、社会的、等々。

実際、私たちがこの世界でしていることはすべて、私たちと外の世界との間にバランスを保とうとする努力でしかない。少しでもバランスが崩れると私たちは幸せではなくなるからだ。私たちは社会と、自分の体、心、感情と、そしてあらゆるものすべて、自然界そのものとバランスがとれていなくてはならない。人生における努力はすべて、さまざまな段階やレベルで、私たちの人格と外の環境との間に調和をもたらすための漸進的な動きでしかない。あなたの活動は宇宙の活動なのだ。だれか個人がどこか世界の片隅で活動しているのではない。活動はすべて宇宙活動が個人を通して行われているものだ。

**サラ：** 宇宙活動とは何ですか。

**スワミジ：** 宇宙活動とは、すべてが同時に起こる宇宙の総体的活動であり、また、有限である個体の無限に向かう動きのことだ。全宇宙が絶対的存在に向かって動いている。それが私たちが進化と呼ぶものだ。宇宙は絶対的存在と一つになるまで、じっと停止していることはできない。

**サラ：** 夢の世界である宇宙が絶対的存在に向かって動いているという意味ですか。

**スワミジ：** その通り。万物、原子の一つ一つまでもがその目的に向かっていてる。

**ラリー：** しかし、この夢である宇宙が絶対的存在ですよ。

**スワミジ：** 進化の過程全体が、ある種の夢だと言うことができる。宇宙夢だが、系統的なものであるため進化と呼ぶのだ。系統的で相称的だ。

**サラ：** しかし夢ならば、実際には何も起こっていません。

**スワミジ：** 何も起こっていないということはない。あなたが夢を見ている時、それは実際に起きている。そうでなければ夢とは呼ばない。今のあなたは夢から目覚めているので何も起こらなかったと言っているが、夢を見ているとき夢はとてもありアルだ。同様に、絶対的存在に目覚めるとき、あなたはこの世界を見なくなる。しかし、そのような境地に至るまでは、この世界は私たちの知覚対象として存在する。

**サラ：** しかし、絶対的存在の意識にいれば、世界は何もしていないように見えると思うのですが。

スワミジ： 眠りから覚めると夢の世界が消えてなくなるように、あなたの意識が絶対的存在の意識に没入するとき、あなたにとってこの世界はなくなる。夢の世界はあなたの心に帰入したのだ。夢の中での現象がすべてあなたの心に帰入したのだ。同じように、目覚めている世界の現象すべてが絶対的存在に帰入する。目が覚めているときに夢の世界を見ることがないように、絶対的存在に到達したら、この世界を見ることはなくなる。この世界が消えてなくなるのではなく、根源に帰入するのだ。

目覚めているとき、夢の中で会った人たちに会うことはできないが、誰かを失ったわけではない。夢の中の友人を失っても、「大事な人をなくしてしまった」と悲しむことはない。夢の世界の人たちはあなたの心に吸収されたからだ。同じように、絶対的存在に帰入しても何も失うものはない。絶対的存在はすべてを吸収し、あなたはすべてを包括する完全なるものになるのだ。

サラ： すべてが吸収されるとは… よく理解できません。

スワミジ： 夢の世界の物体が目覚めているあなたの心に吸収されるのと同じだ。同様のことが起こるのだ。

サラ： 宇宙のプロセスとは何ですか。

スワミジ： 宇宙のプロセスとは粗雑なものが精妙なものへ、精妙なものが根源的なものへ、根源的なものが絶対的存在に溶け去るプロセスのことだ。外的なものが内的なものへ、内的なものが普遍的なものになるのだ。三つあるいは四つの段階がある。それが宇宙のプロセスだ。

ラリー： 絶対的存在は宇宙を超越するものですか。絶対的存在と宇宙は同一ですか、それとも宇宙を超越するものですか。

スワミジ： 目覚めている心は夢を見ている心を超越するものかね。今思考している目覚めている心が、昨晚は夢を見ていた。目覚めている心は夢を見ていた心を超越するものかね。目覚めている心は夢を見ている心を超越しているものかね、それとも同一の心かね。

ラリー： 同じ心の異なる状態です。

スワミジ： あなたの質問に対する答えも同じだ。同じものの異なる状態であり、二つの異なるものではない。

ラリー： 異なる状態があるというのは、無限なるものに制限が課されることになりませんか。

スワミジ： 夢を見ている心と目覚めている心があるとしても、二つの心があるわけではないので制限はない。一つの心が二つの見え方をしているだけだ。制限はない。夢から目覚めたとき、なにかを失ったと感じるかね。そうでなければ、どこに制限があるのかね。夢の世界を見てきたあなたは、今はその夢の世界を失ったことになるが、依然として完全なままだ。

ラリー： 夢を見ている時の私は目覚めておらず、自由に行動できないというのが制限です。

スワミジ： そういう意味では、自分が個人だと考え、普遍的存在だとは信じていないあなたは今も制限されている。自己の普遍性を信じていないという意味において、あなたは制限されていると言えるが実際には違う。本当は制限されていないのだが、どういうわけか、あなたはその制限に固執している。その制限は、そのような固執とは反対の影響を持つ「普遍的瞑想」という意識の活動によって克服されなければならない。逆の考え方をするのだ。主体として思考するのではなく普遍的な思考をするのだ。

ラリー： 絶対的存在には異なる状態があるのですか。

スワミジ： 絶対的存在自体に異なる状態はないが、あなた個人としての視点では異なる状態があるように見えるのだ。このような疑問が生じるのは、あなたが絶対的存在から分離しており、絶対的存在を自分の目前にある研究対象のように扱っているからだ。それはあなたの研究対象ではない。あなた自身がそれなのだ。しかし、どういうわけか、あなたは「それ」から心理的に孤立しているため、それについての質問をするのだ。「それ」というものはない。それは観察対象ではなく、あなた自身なのだ。

ラリー： 私は進化のプロセスをたどっています。

スワミジ： あなたは、あらゆる面で進化のプロセスをたどっている。あなたは自分になろうと努力しているのだ。より大きな自分になろうとしているのだ。

ラリー： しかし、私は最初から私でした。

スワミジ： あなたは最初からあなただ。あなたはどんぐりのような存在、種、原子のような存在から野菜、植物になり、動物になり、人になった。今も続く進化のプロセスを通して、さらに大きな存在へと進化を続けている。

ラリー： しかし、私の始まりは絶対的存在だったのですね。

スワミジ： 絶対的存在として始まり絶対的存在として終わる。

ラリー： 私も絶対的存在として終わるのですか。

スワミジ： もちろんそうだ。

ラリー： しかし、元の私に戻るためには進化のプロセスを経なければならないのですか。

スワミジ： そうだ。進化の過程であり、意識の過程と言える。

ラリー： なぜそのようなことが起こるのですか。

スワミジ： あなたは再び同じ質問を繰り返している！（笑）そのような質問は無意味だと言ったはずだ。しかし、あなたは同じ質問を何度も繰り返している。結果が原因の外にある限り、結果が原因を知ることはできないのだ。

ラリー： もし私がすでに絶対的存在であるのなら…

スワミジ： あなたはそう思っていない。そう信じるできないことが問題なのだ。自分が絶対的存在だという確信がなければ、あなたは絶対的存在ではない。自分が絶対的存在の外にあると感じているため、あなたにとってあなたは絶対的存在ではない。

ラリー： なぜ自分が絶対的存在だと感じる必要があるのですか。私が絶対的存在ならば、私は絶対的存在ではないですか。そのように自分が自覚しているかどうかは問題ではないのではないのでしょうか。

スワミジ： そうではない。私たちにとって絶対的存在はある種の繭<sup>まゆ</sup>で覆われているが、絶対的存在はそのようなものを求めていない。あなたは、なぜそのような繭で覆われているのかと質問しているのだ。それはあなたが絶対的存在に到達してから絶対存在に質問すればよい。今はそのような質問をすべきではない。「どうして夢に山がでてきたのだろうか」。夢の中で起きたことについて、このような質問はしないはずだ。夢の中で山を見たからといって、周りの人たちに「なぜ私は昨晚夢の中で山を見たのでしょうか」と質問するようなものだ。実際には起きていないことなのだから、そのような質問をすることはない。

それは夢を見ている人が夢の中で、「目が覚めるとはどういう意味だろう」と質問するようなものだ。夢を見ている人がこの質問の回答を得ることはない。夢を見ている人は、夢から目覚めるまで目が覚めるということを理解することはできない。だから「なぜ」と質問しても無駄だ。瞑想によって直接体験することでしか答えは得られない。砂糖を口にしなければ、甘さを知ることはできない。人に「甘さとは何ですか」と質問するよりも自分で砂糖を口にしてみるべきだ。どれだけ議論しても砂糖の甘さを知ることはできない。

ラリー： 分かりました。質問できないとしても、自分が置かれている状況を理解することはできると思います。つまり、私はもともと絶対的存在だった…

スワミジ： もともとも何もないし、そのようなことは何も起きてはいない。あなたは再び原因と結果を持ち出している。

ラリー： 分かりました。私は常に絶対的存在だったのですね。

スワミジ： このような質問はすべて、あなたが絶対的存在から分離していることを意味する。あなたは間違った視点に固執しており、そこから答えが得られることは決してない。あなたの質問はすべて、あなたが絶対的存在の外にいるという確信に根ざしたものだ。そうでなければ、そもそも疑念は生じない。

ラリー： しかし、それは…

スワミジ： そすると、いったいどうなるのだね。あなたは今のままで居続けることになる。あなたは自分が絶対的存在の外にあるのだと信じている催眠状態にあり、催眠状態下で催眠状態についての質問をしているのだ。質問も催眠状態の影響下にあり、理性



的な質問ではない。意識が間違っただけの観点をとっているだけで、同じ論点を延々と議論しても意味がない。

午前中に話したことを思い出してほしい。自分の意識を体の外、この床の上に置いてみるのだ。そうすれば質問は生じなくなるだろう。疑念を持っている意識を2、3メートルくらい離れたところに座らせて、質問している自分を見るのだ。そうするとどうなるか。そのときあなたは即座に溶け去るだろう。ヨーガは実践だ。単なる理論ではない。質問に終始するのではなく、実践するのがヨーガだ。論より証拠。ヨーガは頭で考えるだけではない。

ラリー： しかし、自己が<sup>まゆ</sup>繭で覆われていることを認識するのが一つのステップだと思います。

スワミジ： あなたは質問者、個体としての意識を持ち、絶対的存在は自分の外にある質問の対象、知識の対象だと考えている。それが繭だ。絶対的存在はあなたの外に在るものではなく、それについて質問することはできない。いったい誰が誰に質問をしていることになるのか。あなたは再び質問者と質問対象の間に隔たりを作っている。

要するに主体と客体の間に心理的な隔りがあることが問題なのだ。どれだけ執拗に問いかけようとも、質問者と質問の対象という二元性の束縛から逃れることはできない。ヨーガの実践はとても難しい。簡単ではない。どれほど懸命に取り組んでもうまくはいかない。どうしてもあなたは自分と質問対象の間にある要素に心を集中させることができない。あなたの意識は、あなたとあなたが話している物との間にあるものに根ざしていなければならない。

非個人的なアプローチが必要だ。あなたはヨーガを実践していないから質問するのだ。一晩中瞑想したらどうなるか試してみなさい。自分の中ではなく外に自己を置いてみるのだ。自分以外の人になって、どうなるか試してみなさい。

ラリー： 瞑想プロセスによってそれが可能となるのですか。

スワミジ： 可能となる。それには一秒とかからない。実際、テレパシー等ではこの原理が使われている。遠く離れたロンドンにいる人のことを深く考えることで、その人に影響を与えることができるのだ。それはあなたの意識があなたの体の外へ移動したことを意味する。それがテレパシーだ。しかし、もしあなたの意識が体に閉じこめられていたらテレパシーは不可能だ。深い瞑想が必要である。常に自分以外のものになる努力

をするのだ—自分の外の存在、自分を超越る存在、自分より大きな存在というように。なぜ今の自分のままでいようとするのか。これまで何年もずっと今の自分の状態であり、そのために苦しんできたというのに。だから少し状況を変えてみるのだ。自分自身が自分の意識の対象となるのだ。意識を自分の外に置くということは、自分が対象物になるということだ。そうすれば今ほど自分のことを心配することはなくなるだろう。

1990年12月12日午前

ラリー：今朝、瞑想をしました。

スワミジ：毎日深く集中して自己に没入するのだ。

ラリー：スワミジがおっしゃったように、自分を自分の外に置こうとしてみました。

スワミジ：自己を得るために自己を失うのだ。

ラリー：自分から少し離れたところに自分を投射しようと試みました。

スワミジ：それでよろしい。自分から離れたところに自分を投射することで、今考えている自分よりも大きい存在になるのだ。体の中にいるあなたは小さな存在だが、私はあなたにもっと大きな存在になってほしい。体の外に自分を置くとき、あなたは今の自分よりも大きくなるのだ。カーペット上のみならず、太陽や月、星に自分を置くことも可能だ。そうすることで、あなたはより大きな存在になり、普遍的存在に近づくことが可能なのだ。

宇宙の果てに自分を置くこともできる。そのときあなたは全てを包含し、自分の外にはなにもない、普遍的と言える存在にさえなることができる。「我は我なり」、「我は有て在る者なり」であり、これが瞑想の技法だ。毎日できるだけ長く瞑想しなくてはならない。これが最も重要な私たちの務めだ。他の義務は副次的、二次的なものだ。さもなければ、小事に終始して大事を失うことになる。私たちは人生において、小事にとらわれて大事を見失っている。そうあってはならない。

そうでなければ、すべてを手に入れて自分を失うことになる。全世界を手に入れても自己を失ってしまうのだ。この世界に生きる人々の活動はすべて、この世界を手に入れて自己を失うためのものでしかない。私たちは外の世界にとっても大きな関心があるが、自分自身については無頓着だ。まるで自分がいなくても世界は存在しているようだが、私たち自身がなくなると世界もなくなる。

だから、自己に必要なことをしなさい。そうすればすべてがうまくいく。木の根に水をやれば、さらに枝や葉に水をやる必要はない。何百という枝があったとしても、一つのもの、つまり木の根に水をやり肥料を与えることで、すべての枝葉の世話をしていることになるのだ。根本を知り、根本の世話をしていれば、この世界の多様性の心配をする

必要はなくなる。木の根がすべての枝と葉、果実を養っているように、この世界についても必然的にうまくいくのだ。

スワミ・シバナンダ大師は、「神が第一で次に世界、あなたは最後だ」とよくおっしゃっていた。原因が最初で結果はその後だ。神が最初に在り、世界は後になって現れた。あなたは最後だ。したがって、自分が第一の地位にあると考えるわけにはいかない。第一のものが最も大きく、それは、そこから生まれた結果であるこの世界、私たちを含むものだ。瞑想は私たちの義務だが仕事としてやるのではない。瞑想は自分であるための手段なのだ。私たちにとって自分自身であること以上に価値のあるものはない。「自分自身に誠実であれ」という言葉がある。自分以外のすべてに誠実であっても無意味なのだ。

ラリー： 瞑想の対象とすべきものはありますか。あるいは何か…

スワミジ： あなたが考える神を瞑想対象にするとよい。あなたは神がどこかにいると考えているが、その神を瞑想するとよい。各人が各人自身の理解と好みに合った瞑想対象を選ぶのだ。神は内にいるという人もいれば、外にいる、あるいは遍在するという人もいる。どのように考えていようとかまわない。あなたが考える神をあなたの瞑想対象にするのだ。

ところで、自己実現に関する本を前回渡したかな。

ラリー： いただきました。

スワミジ： 読んだかね。

ラリー： はい。読みました。

スワミジ： 本の内容をすべて覚えていないかもしれないが、あなたが今質問しているほぼすべての疑問についてその本の中で触れている。もう一度読めば、あなたの質問に対する答えがすべて得られるだろう。

ラリー： 繰り返し読む必要性を感じています。

スワミジ： あの本は凝縮された内容になっている。

ラリー： 一度答えを聞いても、同じ答えを何度も繰り返して聞く必要を感じます。

スワミジ： 何度も繰り返し読めば、ほとんどのことが理解できるようになるはずだ。意識そのものを深く分析した書だ。

ラリー： 私は今、宇宙意志について理解しようとしています。

スワミジ： 宇宙意志かね。それは宇宙存在の働きだ。存在の意識を「意志」と呼んでいるだけだ。普遍的存在は存在しているという意識を有しており、その意識を「意志」等の名で呼んでいるのだ。意志とは意識の肯定でしかない。宇宙意識であるから、「宇宙意志」と呼んでもよい。

ラリー： 宇宙意識がこの世界というかたちで現れているのですか。

スワミジ： 宇宙意識は何も失うことなくこの世界となった。この世界になると言っても、それは牛乳がヨーグルトになるような変化ではない。それは岩に彫像が秘められているようなものだ。岩はさまざまな彫像を内在していると言える。岩のままであっても、そこから像を彫ることができるという意味で、岩は彫像を内在していると言える。同様に絶対的存在の中に世界、色相かたちはないが、すべてが絶対的存在に内在されていると言える。絵の具の中にはすべての絵が内在していると言えるし、あるいは何の絵も含まれていないとも言える。どちらの言い分も正しい。岩は彫像を含まず、絵の具に絵は含まれない。しかし、彫像や絵を内在しているとも言えるのだ。

ラリー： 昨日スワミジは、万物が絶対的存在に向かっている。私たちの人生全体が絶対的存在へと向かう進化のプロセスだとおっしゃいました。なぜこのようなプロセスが始まったのか私には理解できません。

スワミジ： また「なぜ」という質問をしている。今後「なぜ」という言葉は使わないようにしなさい。「どのようにして」その意識に到達できるのかと質問すべきなのだ。すでに何度も言っているように「なぜ」と質問するのは無意味だ。結果の中に原因を探しても無理なのだ。

ラリー： 原因を理解したいのです。

スワミジ： そもそも原因というものはない。あなたはすべての結果には原因があると考えているが、それは時間と空間に巻き込まれた意識の経験的思考でしかない。原因と

結果というものはなく、あるのは不可分の塊だ。目が覚めれば夢の問題が解決するように、答えは自然に得られる。目を覚ませば夢に関する疑問がなくなるのだ。なぜ目を覚ます前に質問するのかね。まずは目を覚ますことだ。そうすれば質問する必要もなくなる。昨晚見た夢について質問しないのは、夢であったことが明らかだからだ。

今のあなたは夢の中にいて夢に関する質問をしている。まず目覚めなさい。それが私のアドバイスだ。そうすれば答えを得ることができる。あなたが、あなたの求めている対象になるとき、目覚めが起こるのだ。無意味に「なぜこの世界はあるのか。なぜ世界はこうなのか」などと質問することではなく、真理実現の方向に進んでいくために実践するのが私たちの義務だ。そのような質問の答えを得ることはできないし、答えを得る必要もない。実践を続けていけば徐々に疑問はなくなっていく。やがて自分自身の中の光り輝く知恵によって答えを得るようになるのだ。重要なのは実践だ。

ラリー： 原因はあっても、私たちが考えているような原因ではないということですね。

スワミジ： そうだ。理論的な意味での原因でしかない。神は何も生じさせない。神は神であるだけだ。しかし、私たちには因果関係があるように見えるのだ。私たちの務めは実践であり、懸命に実践し続けることだ。そうすれば、自身の内から刻々と答えが与えられるであろう。そして水平線は明るさを増していく。

ラリー： 実際には時間も空間もなく、神が存在しているだけなのですね。

スワミジ： 神は神として存在しているだけだ。「我は我なり」が究極の真理であり、それ以上に何も言うことはない。

サラ： 神、絶対的存在に向かう動き自体が夢の一部であり、夢の中の幻想ではないとどうして言い切れるのでしょうか。

スワミジ： 夢の一部でしかない。まったくその通りだ。絶対的存在に向かう私たちの動きも夢の一部でしかない。しかし、夢を終わらせる夢というものもある。トラに襲われる夢を見たことで夢から目が覚めることがあるように、夢を中断させる夢というものもあるのだ。トラは夢の一部であり、そのトラに対する恐怖も夢の一部だ。しかし、その夢のトラによる恐怖があなたの目を覚まさせたのだ。現実には存在しないトラが現実ではない夢を終わらせ、目が覚めた状態を生じさせたのだ。

導師は夢に出てくるトラのような存在であり、弟子が夢を見ている人だ。導師も弟子も夢の中にいることに違いはないが、片方はトラで、もう片方は夢を見ている人だ。トラのうなり声も夢の一部でしかないが、その恐怖で夢を見ている人の目が覚めることがあるのだ。このように、夢にも二つの種類がある。夢から目覚めることに資する夢と、あなたを夢の世界に引き込み、夢にとどめておく夢だ。あなたの言うとおりに、すべてのプロセスが夢の中で起きていることであり、夢の外にあるのではない。しかし、そこには違いがある。夢を継続させる夢と夢を終わらせる夢という二つのタイプがあるのだ。夢の一部であっても靈的修行、瞑想はトラのようなものなのだ。

サラ： 神に対して、車などを欲しがるような強い欲求を持たないと感じる場合があります。

スワミジ： それはあなたが神を理解していないからだ。神についてのあなたの理解が足りないために、神に引きつけられないのだ。牛に金のネックレスをあげたら牛は喜ぶかね。牛が欲しいのは草だけだ。違うかね。（笑）草と金のネックレスのどちらの方がいいのか。どれだけ価値を感じるかは、あなたがそれをどれだけ理解しているかに掛かっている。私たちの車に対する理解は、私たちの神に対する理解よりも明確だ。車は触ることができる有形物であり、その中に座することもできる。それに比べて、神はあなたにとって単なる思考の産物のように思えるのだ。

しかし実際には逆だ。車が思考の産物であり、実在しているのは神なのだ。これを理解するためには、型にはまった思考をするよう条件付けられているあなたの思考を、そのような条件付けの影響から解き放つための積極的な努力が必要だ。私たちの思考はすべて強固な型にはめられており、十分な努力なしでこの思考の型から解放されることはできない。見えないものが実在で、目に見えるものは実在ではない。

サラ： 祈りとは何ですか。祈ることに意味はあるのでしょうか。

スワミジ： 祈りかね。祈りとは自分を超越する次元への思いを奮起するための意識の肯定だ。あなたは自分を超越する何かを求めているのだ。それを神と呼ぶかどうかは問題ではない。自己を高めたいという求道心、より高い次元に到達したいと切望する心の肯定であり、それがあなたの祈りだ。それを言葉で表現するのもよいし、心で思い続けるだけでもよい。どちらも効果がある。

サラ： 自分を超越するものとは神のことですか。それとも、それはまだ神のレベルではないのでしょうか。

スワミジ： 神と呼んでもよい。自分を超越るものはすべて神の現れだ。しかし、神の体験にも異なる度合いがある。

サラ： より高い自己にも祈りがあり、またそれを守るものがありますか。

スワミジ： より高い次元の自己は、それよりさらに高い次元の自己に祈る。自己の現れには度合いがあるのだ。

サラ： それが絶対的存在に到達するまで続くのですか、それともどこかで大きな変化が生じて、そのような段階が途絶えるのでしょうか。

スワミジ： 中断するという事は決してない。完全なる包括性に到達するまで、低次の包括性からより高次の包括性へと徐々に上昇するのだ。完全なる包括性に到達することで祈りはなくなる。すべてと一体となることで祈りはなくなる。

サラ： 私のより高い自己、体を持たない自己の状態とはどのようなものでしょうか。

スワミジ： 高次の自己は複数ある。一つではない。あなたの心的自己は肉体的自己よりも高次であり、知的自己は心的自己よりも高次だ。そして霊的自己は知的自己よりも高次で、絶対的自己はすべての自己に勝る。しかし、これらはすべてあなた自身の自己の度合いでしかない。あなた自身が進化のはしごを一段ずつ昇っているのだ。自分自身のより高い次元へと徐々に昇ってゆくのだ。

サラ： 一段一段、より高次の自己に昇りつめたとして、例えば 10 段階上の自己… これは単なる例ですが… どうなればその上昇が止まるですか。

スワミジ： そうだ。多くの段階がある。無限に到達すれば上昇は止まる。無限を超えるものは何もないからだ。永遠を超えるものは何もないため、永遠に到達すると上昇は止まる。それが絶対と呼ぶものであり、大海に行き着くことで川の流れが止まるように、そこで進化は終わる。自己に満足することで低次の自己の上昇が止まるのだ。

サラ： 海へは緩やかに到達するのですか、それとも突然到達するのでしょうか。

スワミジ： 徐々に到達する。非常に自然でゆっくりとした動きであり、急な動きではない。



サラ： 下方へ向かう動きもあるのですか。無限である絶対的存在が、どのようにして肉体のレベルにまで降りてくることができるのでしょうか。

スワミジ： 実際に降りてくることはない。そのように見えるだけなのだ。岩のたとえ話をしたが、岩が彫像になるのではなく、岩が彫像のレベルに降りてくることはない。岩の中に彫像があるわけではないが、彫像が内在されていると考えることができる。その意味においては、岩が彫像のレベルへ降りてきたと言えるだろう。岩が実際に彫像になることはないが、彫像を内に秘めていると想像することができる。

絶対的存在が他のものになることはないが、あらゆる生成の可能性を秘めているために、そのように考えることができるだけだ。何かになる、「生成」ということは、それが永遠ではないことを意味するため、絶対的存在が生成することは決してない。

サラ： では、私たちはどのようにして上のレベルに向かうのですか。

スワミジ： より高次の自己に向かうのも、夢に例えることができるような概念的プロセスだ。実際にはそのようなプロセスは存在していない。そのようなことは起きていないのだが、あなたの意識は不思議な世界に関与しているために、そのような動きがあるように見えるのだ。さきほど言ったように、夢の中にトラが出てくるが、トラもトラに遭遇する人も存在していない。しかし両者が存在しているように見える。プロセスはすべて夢の世界の物語であるが、意識は存在でもあるゆえに、プロセスの各段階がリアルに見えるのだ。

ラリー： 岩があらゆる彫像を包含しているという例えを使うなら、夢から覚めた後も、夢を見ていた人は岩の中にいるということになりませんか。夢を見ている人は、ずっと夢を見続けるということになりませんか。

スワミジ： 「夢から覚めた後」とはどういう意味かね。誰が目覚めるのかね。

ラリー： 絶対的存在が目覚めます。

スワミジ： 一度目が覚めたら再び夢を見ることはない。それが聖典の教えだ。夢は永遠に終わる。もし絶対が再び夢を見ると言うのであれば、それは因果関係を持ち出すことになる。絶対的存在が何かの原因であるとするのは概念上の必要性だ。絶対的存在の中では原因という概念にも終止符が打たれ、再び因果関係が生じることはない。

再び絶対が何かの原因になる可能性があるというのは、原因があったと考える束縛された心に生じる考えだ。すでに原因があると感じている心の働きのために、再び同じことが起こると考えるのだが、元々原因はなく、因果関係は生じない。因果関係というのは、すべての思考構造の必然的結論であり、現象世界における知覚の法則だ。

ラリー： 因果関係がないのであれば、今もないということになります。

スワミジ： 今もない。しかしあなたは、そのような考えをすることができない。したがって、物事には原因があると考えるプロセスを進むことを余儀なくされている。そして夢の中での経験のように、トラがいることを受け入れるしかないのだ。トラはあなたの目を覚ましてくれる。しかし結局はトラもいないのだ。実際に存在していないものであっても、あなたがそこに存在していると信じていれば、それから助けを得ることもできる。

ラリー： しかし、私たちが目を覚ますということは、その後も時間が継続していくこと、つまり変化を意味しませんか。

スワミジ： 目覚めも時間の中でのプロセスだが、無限に到達するとき時間は無くなる。普遍性に到達するとき、時の経過に終止符が打たれるのだ。だからあなたは、時間プロセスに終止符を打ち永遠の経験を得るために、意識の無限性を瞑想すべきなのだ。有限のものを考えていては時間はなくなる。

ラリー： 最初からこの世界は存在していなかったということですか。

スワミジ： 世界は最初から存在しておらず、世界の存在はありえない。神に到達するのは容易ではない。非常に困難なことだが話を聞くのは易しい。神に到達することほど難しく、また同時にシンプルなものはない。神を知るのに時間はかからない。あなた自身であるからシンプルであり、また、あなた自身であるから難しいのだ。自分自身よりも難しいものはない。他の人たちを理解するのは簡単なのだ。自分に近ければ近いほど、それを理解するのが難しくなる。私たちは月や星について天文学的に理解することができるが自分自身を理解することができない。それは理解する者と理解の対象との間に距離がないからだ。自分自身が問題なのだが、自分自身が問題だというのはありえないというジレンマがある。

ラリー： 一人の人が目を覚ましたら…

スワミジ： 一人だけが目覚めるというのはいない。あなたが夢から目覚めるとき、夢の中にいたあなたの友達も皆夢から目覚める。あなたの友達だけが夢の中に居続けるということはない。（笑）

ラリー： スワミジは昨日、私たちは大海の水滴のようなものだと言われました。

スワミジ： その通り。夢の中の人たちは皆、あなたの夢という海の中に存在していると考えることができる。

ラリー： だとすると、海は私の心の中だけにあるのでしょうか。それとも海は単独で存在しているのでしょうか。

スワミジ： 私の心というのは問題外だ。多くの人が現れる夢を見ていたのは誰かね。友人の心が夢をみていたのかね。それともあなたが夢見ていたのかね。

ラリー： 夢を見ているのは私です。

スワミジ： 同じように友達を見ていた、あなたの友達の心はどうなるのかね。その友達には心がないのかね。あるいは、その友達が彼の夢の中で、あなたが友達のことを夢見ていると考えていたのかもしれない。

ラリー： 夢を見ているときは、友達も心を持っていると考えました。

スワミジ： どうして彼があなたのことを夢見ているとは考えないのかね。彼もあなたと同じくらいリアルなのだ。

ラリー： 私の夢ですから。

スワミジ： 彼の夢で、彼の夢の中にあなたがいるのかもしれない。

ラリー： そこなのです。彼も海の中の一滴であるなら…

スワミジ： 実際には、夢を見ているのはあなたの心でも夢の中の友達の心でもない。それは、あなたと他の人たちを包含する総体的な心だ。あなたの心が夢みているのでもなければ、あなたの夢に現れる他の人の心が夢をみているのでもない。夢を見ているのは、夢に出てくる人や山などを含むすべてを一つにする何かなのだ。目覚めていようと

も夢を見ていようとも、そこには総体的な心がある。すべての思考はゲシュタルト、統一的全体だ。

ラリー：すると、私が目覚めるということではなく、絶対的存在が目覚めるということですか。

スワミジ：「一人」の人という意味での「私」ではない。総体的な心が継続的に目覚めるのであり、夢を見ている人を含む全てがその総体的な構造に包含されている。全体的な目覚めであり、特定の個体が別々に目覚めるのではない。

ラリー：では、私が目覚めようとする努力は…

スワミジ：この「私」という言葉がやっかいなのだ。様々な意味で使える。

ラリー：では、私の自我による努力…

スワミジ：「自我」という言葉を使うにしても注意が必要だ。自我はあなたの体の中に鎮座しているのではない。あなたの自我は、あなたが話しているものにすでに触れており、あなたが目で見ているものと繋がり、あなたが話しているとき、あなたが知っているものと不可分であるため、自我があなたの体の中にあるとは言えないのだ。もし自我が体の中にあるのであれば、外に何かがあることを知ることはできない。

このように、私たちが普段この言葉を使うときにも、私たちは自我が自分の中にあるという間違っただけの考えをしている。もし自我が完全に私たちの中にあるのであれば、どうやって外にあるものを知ることができるのかね。自我は中にだけあるのではなく、自我の思考あるいは知識の対象の範囲にまで、外にもあるのだ。たった今も、あなたは、あなたの外の外にもいる。そうでなければ、あなたは何か自分の外にあることを知り得ないのだ。

ラリー：私の自我は五感によって外のものを知るのはではないのですか。

スワミジ：自我は知識の対象すべてと無意識につながっているが、意識的には体の中にいると感じている。心には無意識と顕在意識の両方がある。心が完全に中にあるのであれば、あなたは体という牢獄に閉じこめられていることになり、自分の体を知ることさえできない。

ラリー： 海の中の一滴が…

スワミジ：（あいにく！）大海の一滴は、他のすべての水滴とつながっている。よって一滴の水滴に起きていることは、すべての水滴に起きていると言える。水滴はそれぞれが孤立しているわけではないのだ。ここにも全体的な総体性がある。

ラリー： では、一人が神の意識に到達すると…

スワミジ： あなたが神に到達するときには宇宙心が目覚めるため、一人の人、多くの人という考えは生じない。宇宙全体でただ一つの心が働いている。多くの心があるのではない。あなたが神に到達するのではなく、宇宙的存在が普遍の神に到達するのだ。「あなた」や「私」という考えは超越されなくてはならない。

ラリー： しかし、この知識を悟ったとされる聖賢がいます。

スワミジ： それは、あなたがまだ聖賢が到達した境地の観点ではなく、孤立した人間としての観点で考えているからだ。神に到達した聖賢にとって世界は存在しない。これもまた、夢の中の一人が目覚めても、他の人たちはまだ夢の中にいると考えているような問題と同じだ。あなたが夢から目覚めた後も、夢の中にいた友人はまだランチでもしているのかね。（笑）どうだね。彼らもあなたと一緒に夢から目覚めたのだ。心の複雑な関与について理解するのは容易ではない。

ラリー： 実に面白いです。（皆笑う）

スワミジ： これ以上この話を続けるのはやめよう。そうでないと、心が受け入れがたいことを聞かされて、ここに座っている人たちの気が変になってしまう。皆の平和を乱さないよう、もうこれ以上話すのはやめよう。（笑）どうだね。あまり皆を不安にしないほうがよいだろう。いずれにしても、この会話を録音しているようだから、またそれを聞けばよい。

ラリー： 一点確認させてください。私の夢の中でスワミや聖者が神に到達した場合…

スワミジ： そのスワミも、夢を見ているあなたを含む、あなたが夢の中で見た人たちの一人でしかない。

ラリー： 夢の世界の一部でしかないのですね。

スワミジ： そうだ。夢の一部でしかない。しかし、夢を見ている人に見えるあなた自身も、「総体的な夢見る人」にとっては夢の一部でしかない。

ラリー： すると、海は多くの水滴からなっているのですか、それとも海に水滴はないのですか。

スワミジ： 海に水滴はない。水滴があるように見えるだけだ。完全なる全体の働きであり、海全体が、海全体を有機的に構成するすべての滴だと考えているのだ。

ラリー： つまり、友達もいないし、夢に現れる他の物も存在しないということですね。

スワミジ： すべてを包含するあなただけが存在している。単独の存在が単独の存在に到達するのだ。

ラリー： では私が死ぬとき、誰かが死ぬとき…

スワミジ： 人が死んでも何も起こらない。再度体を持つ方向へ進むだけだ。自己実現を達成しないかぎり何も変わらない。

サラ： 自己実現を達成するとどうなるのですか。

スワミジ： 死はカルマの影響による普通の因果プロセスだ。死後もあなたは個性を維持するが、自己実現すると個性はなくなる。今ここで話しているのは死ではなく自己実現、即ち個体が普遍的全体と一つになることについてだ。そのような合一は人が死んでも起こらない。自我は存続し、執着も存続する。そして転生が起こるのだ。死ぬことに意味はない。毎朝夢から目覚めても同じ人であり続けるようなものだ。同じことを繰り返していても意味はない。

ラリー： 人が死んでも夢は続くのですね。

スワミジ： 死を迎えても夢は終わらない。単なる体の死ではなく、自我が死ななければ意味はない。肉体の死ではなく、自己実現によって夢が終わるのだ。

## 1990年12月12日午後

ラリー： スワミジがトロントを訪問することは可能ですか。

スワミジ： この世に不可能なことは何もない。ただし何事にもしかるべき時期がある。その時期が今かもしれないし、明日かもしれない。あるいは遙か永遠の先かもしれない。あらゆる可能性がある。あるいは、普遍の意識としてトロントを訪れるかもしれない。それもトロントを訪れる一つの方法だ。原型<sup>アーキタイプ</sup>として旅をするかもしれない。「アーキタイプ」という言葉があるが、アーキタイプとは物の原型を意味する。物の原型をアーキタイプと呼び、その影、アーキタイプの表れをプロトタイプと呼ぶことがある。プロトタイプが原型だと考える人もいるが、アーキタイプが原型であるので、プロトタイプはそれを映し出したものと考えべきであろう。

たとえば、あなたが川の水面に映った自分を見るとき、そこには二人の人がいる。川岸に立っている人と水面に映った人だ。あなたが原型であり、アーキタイプだ。そして水面に映ったあなたは原型の影のようなコピーだ。今ここにいるあなたは、天界にいるアーキタイプが映し出された存在なのだ。あなたの本質は今も天界にあり、この世界にあるのではない。自分を超越する何かに絶え間なく引き寄せられるのはこのためだ。

この世界にいるあなたは常に何らかの不満を持っている。あなたは一瞬たりとも全く不安のない、あるいは完全に幸せな状態にいることはない。その理由は、この世界にいるあなたは、あなた自身ではないからだ。真のあなたは別の場所におり、その場所があなたを強く引き寄せるために、プロトタイプ、つまり影の存在であるあなたは一瞬たりとも気が休まるときがないのだ。

プラトンがこのような例えをよく使う。それが小さな木の葉であれ、万物の原型的存在は天界にある。あるいはもう少し理解し易くするために、石が分子から成り、分子が原子から、原子が電子といったより微細なものから成っているという例えを使ってもよいだろう。目に見えない内なる精妙な力が石の天界での存在だ。石が地球であり、石が内に秘めている、より精妙な形がアーキタイプだ。それが地球のリアリティでは石として存在しているように見えるのだ。

あなたは、実際には複数の存在世界に生きており、一つの存在レベルにだけ属しているのではない。あなたは完全にここにいない。今のあなたは本来のあなたの断片でしかない。しかも本物の断片ではなく、映し出された断片だ。つまり人には二重の欠陥がある。一つは原型ではないということ。原型はどこか別のこところにあり、そのため私たちの



心が落ち着くことはない。さらに、原型ではない断片的な存在であるばかりか、映し出された影のような存在であり、本物の断片ではない。

あなたは単純に真の実体の一部ではない。もしそうだとしたら、この世界で小さな神として存在していただろう。人は神の一部だと言うが、それは正確ではない。それほど単純ではないのだ。さもないければ、私たちは小さな神としてこの世界で活動していただろう。人は小さな神ではない。全く異なるものだ。人は水面に映った姿のように、逆さまに映し出された存在だ。

さまざまな困難がそこにはある。第一に、映し出されたものであるため、実体のないものだ。第二に、正しく映し出されたものでもなく、上が下に、下が上にと逆さまに映し出されている。そのため、あなたは外にはない世界を自分の外に見るのだ。私は私の原型、アーキタイプとしてトロントを訪れるかもしれないが、今はこのプロトタイプの姿で訪れる必要はないかもしれない。

ラリー： では、ここにトロントを持ってきますか。（笑）

スワミジ： あなたが今言ったことは単なるジョークではない。たった天国がこの場にやってくることも可能だ。不可能なことではない。すべては遍在しているため、あらゆるものが、どこにでも現れることが可能なのだ。だから、あなたが今言ったことはあり得ることなのだ。本当に確信していれば一瞬で無限を手中にすることも可能だ。ある禅師は言った。「家から一步も外に出ることなく、宇宙全体と一つになることができる」。部屋から出なくとも宇宙と一体になれるのだ。どこへも出向く必要などない。

1990年12月13日午前

ラリー：一つ分からないことがあります。

スワミジ：毎日質問があるのだね。

ラリー：はい。

スワミジ：どうすればあなたの疑問がなくなるのだね。（笑）

ラリー：今日は昨日よりは理解が深まったと思います。

スワミジ：私の話をよく聞いていないのではないかね。そうでなければ、話を聞いた次の日に同じ質問をすることはない。しっかり心を集中していないのだ。だから何かが耳に入っているのだが、すべてを把握できていない。まあよろしい。質問しなさい。

ラリー：ありがとうございます。どうも私の岩のようで、毎日スワミジにのみで削られているのですが、まだ完全ではありません。

スワミジ：よろしい。質問しなさい。

ラリー：私は次のように理解しています。意識は一つであり、究極の意識が絶対的存在である。そしてこの世界の多様性はこの意識でしかない。そして、存在するのはこの至上の存在だけであり、すべては至上者であり、存在である。そうすると真実は次の二つのうちの一つしかあり得ないことになります。一つは、多様性という幻影あるいは見せかけは、私個人の心の中だけにあるのではなく、その他何十億ある個別の心と共有されている。あるいは、多様性は私の心の中にだけ存在し、私の心だけが存在している。

スワミジ：あなたの心が単独で存在することはできない。昨日、夢のたとえを使って話したが、あなたの夢の中に出てくる人たちの心と、夢を見ているあなたの心とは相関関係にある。夢は総体的な働きであり、誰かの個別の心の働きではない。普遍的な働きだ。

ラリー：絶対的な心…

スワミジ：絶対的存在と呼んでもよいが、私は今夢のたとえで説明しようとしている。夢という現象は夢を見ている人一人の働きではない。夢は、夢にでてくる対象物を含む総体的なものだ。夢を見ている人がいて、夢の中に出てくる他の人もいる。夢に出てくる人もまた、夢を見ている人を見ている。よって、誰が夢を見ているとは言えないのだ。同じことがこの世界についても言える。誰がこの世界を創り出したのか。それは総体的な働きであり、誰が創ったとは言えない。あなたでもなければ、他の人だとも言えない。すべてを包括する働きであり、誰か一人に責任があるわけではない。

ラリー：では、夢の中の出来事はすべて、夢を見ている人の心の中で起きていることですか。

スワミジ：総体的な夢見る人の心だ。すべての働きは「<sup>トータル</sup>総体的」だ。

ラリー：では、どのようにして私たちがこの世界ですべきことについて実践的な結論を出すことができるのでしょうか。

スワミジ：実践的とは、たとえばどのようなことかね。

ラリー：私は夢を見ている人であると同時に見られている人です。また、その他すべての人や物も、夢を見ている主体である同時に客体でもあります。

スワミジ：その通り。質問は何かね。

ラリー：私は何をすべきなのでしょう。これから先ずっと瞑想だけすべきなのでしょう。

スワミジ：誰がじっと座り続けなくてはいけないと言ったのかね。好きにすればよい。夢の中で何をしようと夢に変わりはない。あなたが夢の中で王様であろうと乞食であろうと、あるいは貧乏であろうと弁護士であろうと、夢は夢であり続ける。あなたの職業が何であっても、夢は最終的に夢でしかない。あなたが弁護士であっても乞食であっても夢であることに変わりはない。万物は万物とつながっており、すべては他の全てと同じように意味がある、あるいは同じように意味がないものだと理解していれば、どのような職業に就いていても問題はない。

ラリー：私が泥棒であっても聖者であっても違いはないのですか。

スワミジ： あなたの意識が「総体的」な思考をしていれば違いはない。しかし、クラウス氏として思考し、泥棒をすれば警察に捕まることになる。総体的な思考をしていれば泥棒になることは決してない。思考に誤りがあるのだ。総体的な思考をするとき、あなたは良いことも悪いこともしない。体の部位に聖者や罪人という違いがないように、関係はすべて、その関係を超越するものによって昇華されるのだ。

ラリー： 総体的に思考するとは、どういう意味ですか。

スワミジ： 総体的な思考とは、思考対象も思考プロセスと不可分な関係にあることを知る思考だ。思考対象は思考プロセスの外にあるのではない。あなたは自分の外に何かを見ているが、それは間違いだ。あなたは自分の外に何かを見るべきではないし、何かがあるあなたを見るべきでもない。両者の間に在るものが、真の見る者でなければならない。これが理解できれば善悪の問題は生じない。そのような二元性は、より高い包括性に吸収される。

ラリー： どう違うのでしょうか。もし私が…

スワミジ： 違いはある。あなたが何かを外に見るときには愛憎が生じる。しかし、あなたが両者の間に在るときには、何かを愛したり憎んだりすることはない。あなたと他の人たちの間に自己を置くとき、あなたは人間ではなくなる。

ラリー： それは理解できます。しかし、夢を見ている絶対的な存在にとって私が夢の世界の物、客体であるならば、私に…

スワミジ： 言葉に気をつける必要がある。あなたは絶対的存在にとっての客体だと言ったが、ここで「主体」や「客体」という言葉を使うべきではない。あなたは主体でも客体でもなく、総体として働いているものの不可分な一部なのだ。不可分なのだから客体ではなく、また主体でもない。

ラリー： しかし、「総体的な夢」あるいはリアリティ、あるいは見せかけの、不可分な一部として私には自由な選択、あるいは自由な選択に見えるものが与えられています。

スワミジ： 自由とは何でもあなたの好きなようにできるという意味かね。それがあなたの言う自由かね。

ラリー： はい。限度はありますが、限度内で私の好きなことができます。

スワミジ：何でも好きなことをするのが自由ではない。自由とは主体と客体との間に保たねばならない調和を保ちながら活動する意識の状態のことだ。そうでなければ自由とは呼ばない。正しい方向に進んでいるときにのみ自由なのだ。あなたの意識は正しく働かねばならない。そうでなければ自由というのは問題外だ。主体あるいは客体という片方の立場で思考するとき、意識は一体として働いていない。片方にバランスが偏っている。

誰もこのような思考をすることができない。何も考えずに何かを考える—このような思考をできるようになるには非常に長い時を要する。外の対象を考えることなく働く思考だ。それは体が同時に左手と右手の両方ことを考えるように、思考が思考を総体的に考えているとも言えるものだ。体は左右の手に対して偏見を持たず、一方の手に対して偏った考えを持たない。体にとって、何かをしているのが右手なのか左手なのかというのは重要ではない。それは体の行為だからだ。手が何かを持ち上げるとき、持ち上げているのは体であり、手ではない。

同じく、あなたが何かをするとき、それは宇宙全体の働きであり、誰それがしたということではない。しかし、この意識を維持することは非常に難しい。私たちの意識はどうしても個人の意識に陥ってしまう。だから毎日瞑想をする必要があると言ったのだ。

ラリー：普遍的法則があるということですね。

スワミジ：普遍的法則が唯一の法則だ。

ラリー：私が主体として思考し、他の人たちを客体として扱えば、それを是正する働きが起こるのですね。

スワミジ：反作用を引き起こすことで是正される。宇宙全体が、外の物という観点で思考しているものに対して反作用を引き起こす。それがカルマと呼ばれるものだ。カルマや因果応報と呼ばれるものは、全体と協調していないものに対して全体が起こす反作用でしかない。

サラ：正し意識の状態であればカルマは生じないのですか。

スワミジ：全体が、有機的なつながりの欠如している部分に対して引き起こす作用がカルマだ。それ以外にカルマというものはない。

ラリー： この世界における私の人生の目的とは、普遍的法則に則って生きるということですね。

スワミジ： まったくその通りだ。そうすれば、あなたは守られ、幸せでいることができる。何も問題は生じない。

ラリー： どの宗教を実践するかは関係ありますか。

スワミジ： あなたが今私と話しているのが宗教だ。それをどのような名前と呼ぶかはあなたの自由だ。私たちが話しているのは宗教以外のなにものでもないが、特定の宗教について話してはいない。私たちが今話しているのは最も高次の宗教だが、人々が実践している特定の宗教とは無関係だ。あらゆる宗派を超越する。

ラリー： 私たちは、どうやってバランスを保てばよいのでしょうか。たとえば、私が人参を食べる場合、人参を引き抜かなければなりません…

スワミジ： あなた自身が人参であることを知らなければならない。あなたが人参を食べたのではない。そのような考えが無くならなくてはならない。人参は誰かに食べられたのではない。あなたも人参も両者の間に在るものに食べられるのだ。再び先ほどの話に戻ってきた。食べているのは、あなたが考えている食べている人と食べられている物の間に在るものなのだ。

ラリー： 私の行為が調和の取れたものであるか、どのようにして知ることができるのですか。

スワミジ： どれくらい人間としての意識を持っているか、あるいはどれくらい人参としての意識を持っているかで知ることができる。人間あるいは人参の意識を持っていれば持っているほどバランスが欠如している。

ラリー： つまり、私の意識が主体あるいは客体にあればバランスを欠いているということですね。

スワミジ： その通り。食べる者と食べられる物は、別のものでつながっており、それが敢えて言うのであれば、真の食べる者だ。食べる者と食べられる物の両者は、別のものに含まれており、その別のものが真の食べる者なのだ。

ラリー： 真の行為者ですね。そして、ある一定の瞑想レベルに達しないと、それを知ることにはできないのですね。

スワミジ： そうだ。

ラリー： すると、この世界の邪悪なことや人々の苦しみは…

スワミジ： あなたは論点と関係のない質問をしている。今話しているバランスの取れた状態は、当然のことながら善悪の概念を超越する。

ラリー： しかし、不均衡がそのような知覚の原因ではないのですか。

スワミジ： それは間違った見方だ。あなたは再び主体と客体という視点を持ちだしている。あなたは両者の間にいない。片方の側にあなたはいる。

ラリー： よく理解できません。主体あるいは客体として思考する人が悪なのですか。

スワミジ： 善であれ悪であれ、それは対象物から自己を分離することで生じる価値だ。人は蛇を忌み嫌うが、蛇は自分自身を恐れない。もし蛇が本当に恐ろしい存在だとしたら、蛇自身にとっても恐ろしい存在となる。そうすると自身に対する恐怖のために一秒たりとも生きていられなくなるだろう。蛇を客体化したために邪悪に見えるのだ。

ラリー： 邪悪なものではなく、あるのはバランスの欠如だということですか。

スワミジ： バランスの欠如が悪なのだ。

ラリー： バランスの欠如が悪ですか。そうすると、例えばヒトラーは悪ではなく、ヒトラーが作り出した不均衡が悪だということですか。

スワミジ： 不均衡が悪であり、それが自身以外のものと対立したのだ。

ラリー： 軍隊が出動して戦争になり…

スワミジ： たとえ軍隊が出動したとしても、それは失われた二者間のバランスを取り戻すために行われたのだ。

ラリー： バランスを取り戻すことは良いことですか。

スワミジ： 私たちは絶えず何らかの方法で適切にバランスを回復しなければならない。内的そして外的なバランスを維持すること以外に、この世界でのあなたの義務はない。

ラリー： もし私がバランスの欠如に気づき、バランスを取り戻すために行動を起こす場合…

スワミジ： あなたはバランスを維持するという意味でしか行動することはできない。ただし、その行動がさらなる不均衡を生み出さないようにしなければならない。非常に慎重であらねばならない。問題の一面に焦点を当てて行動してはいけない

ラリー： 夢を見ている人、夢を見ている絶対的存在は不均衡な状態になったとき、それに対して夢の中で何らかの行動を起こすことはないのですか。

スワミジ： 絶対的存在は知覚者と知覚対象を超える「全体」であるから、バランスを失っていない。

ラリー： 例えば第二次世界大戦のようなことが起こり…

スワミジ： 夢の中で世界大戦が起こることもある。その戦争は夢を見ている心の総体的働きの中で起きている。ある人に発熱、下痢、頭痛があるとする。一人の人間にこれら三つのことが起きているのだが、しかしそれは一つのことが体全体の中で異なる相を持って起きているのだ。戦争あるいは何が起きようとも、それは総体的経験における一つの働きだ。

ラリー： 夢の中で起きているのは、複数ではなく一つの働きであると言われているのですね。

スワミジ： 夢の中だけではなく、目が覚めているときにも、そこにあるのは一つの働きだけだ。たった今もこの宇宙全体で起きているのは一つの働きだけだ。「一人」がすべてを行っている。宇宙には一人しかいないのだ。

ラリー： 私がバランスを取り戻そうとして、何かの行動をするように見えるとき…

スワミジ： 自分を「行為者」として分離する間違いを犯していることになる。



ラリー： 行為をしているのは私ではないのですね。

スワミジ： そうだ。

ラリー： すると、私に自由意志はないのですね。

スワミジ： あなたには全体と一体である限りにおいて自由意志があるが、個人としてのあなたに自由意志はない。個人として完全に自由になることはできない。

ラリー： 全体と一つになる、ならないというのは私の選択ですか。私にそのような選択は与えられているのでしょうか。

スワミジ： 個人としてのあなたに選択の余地はない。あなたはすでに全体の一部であり、全体の一部であるということに気づくことがあなたの義務だ。全体に関与していることを知る努力をすること以外の選択肢はない。

ラリー： 全体との関係を意識するかどうかを選択する余地はないのですか。

スワミジ： あなたの足が「自分は体から独立した存在になろう」と考えるようなものだ。足にそのような選択の自由があると思うかね。

ラリー： いいえ。

スワミジ： 足が、「別の場所に移動してみよう」と言うだろうか。足にそのような選択肢はない。足は体の一部だ。体全体の法に従わねばならない。

ラリー： 私に瞑想をするかしないかの選択肢はありますか。

スワミジ： 瞑想も総体的な心の総体的な働きであり、誰か個人が瞑想しているのではない。主体としての誰かが何かを対象にして瞑想するのではない。総体的な心が自身に目覚めようとしているのだ。これが瞑想であり、「二者間の存在」が真の瞑想者だ。

ラリー： 私が個人として瞑想するという選択をするとき、それは私の選択ではないということですか。総体的な心が、私に瞑想するという選択をさせているということですか。

スワミジ： 総体的な心、そうだ。

ラリー： スワミジが私に瞑想しなさいと言うとき…

スワミジ： 私が瞑想しなさいと言うのは、おそらくあなたの受け止め方とは異なる。

ラリー： 総体的な心の影響により…

スワミジ： 総体的な心が自身に語りかけているようなものだ。

ラリー： 私が独自の思考をするとき、それは私独自のものではないということですか。例えば、瞑想をしないという選択をするとき、それは総体的心が…

スワミジ： あなたがそのような決定をするときも、それは総体的な心が何らかの理由でそのように決定しているのだ。

ラリー： 総体的な心がバランスを維持しようとするのは何か目的があるのですか。

スワミジ： 目的はない。存在に目的はなく、ただ存在しているだけだ。存在が目的であり、存在以外の目的で存在しているのではない。存在は存在の背後に、あるいは存在を超える目的を有していない。すべての目的は存在のためにある。存在が究極の目的であり、存在がそれを超える目的を持つことはできない。すべては存在する。それだけだ。

ラリー： ヒトラーが始めた戦争は、ヒトラーの行為ではなかったのですか。

スワミジ： 無論ヒトラーの行為ではなかった。しかし、彼はそれを自分の行為だと考えていた。彼の意識がすべてを台無しにした。実際には歴史という有機体の中で世界の全プロセスが起きていたのだ。

ラリー： ヒトラーの行為だったが、真の行為者は彼ではなかったということですか。

スワミジ： 究極的にはヒトラーの行為ではなかった。しかし、ヒトラーは自分の行為だと感じていたために、その代償を払わねばならなかった。あなたが束縛されるか自由になるかは、あなたの意識次第だ。行為そのものが重要なのではない。行為に伴うあなたの意識、あなたが行為者だと感じる意識が重要なのだ。自分が行為者だと感じている

限り、あなた自身に責任がある。あなた意識のあり方が束縛であり、行為そのものが問題なのではない。

ラリー： 私に責任がある、あるいは私が何かをしたという感覚は私の感覚ですか、それとも総体的心の感覚ですか。

スワミジ： 自分が誰それだという意識によって総体的な感覚はなくなってしまっている。そこにあることはあるのだが、一時的に停止状態になっている。あなたは夢の中で一時的に蝶になることができるが、もちろん実際に蝶になるわけではない。実際にそのようなことは起きていないのだが、そのときクラウス氏としての意識は蝶の意識によって隠れてしまう。これが私たちに起きていることだ。本当のあなたが何であるかは別問題だ。重要なのは、今あなたが何を肯定しているかということだ。

ラリー： 私の肯定ですか、それとも…

スワミジ： その肯定も実際には総体のものだ。

ラリー： 肯定する感覚はすべて総体的なもの、絶対的存在のものですか。

スワミジ： そうだ。それが事実であり最終的な真実だ。

ラリー： ヒトラーは自身の行為のために苦しんだのですね。

スワミジ： ヒトラーは総体の意識がなかった。真理と戦い、苦しんだのだ。

ラリー： 彼は自身の行為のために苦しんだのですね。

スワミジ： もしヒトラーに総体の意識があれば、彼は黙って何もしなかつただろう。何もする必要はなかつた。この世界の魂がより高い次元へと進化していただけなのだ。

ラリー： ヒトラーの苦しみは総体の苦しみでもなかつたのですか。

スワミジ： 総体は苦しまない。喜びや悲しみを感じ、経験するのは個体だ。

ラリー： ヒトラーの苦しみは、総体の外にあったのですか。

スワミジ： 外科医が指を切断するとき、体は苦しんでいると思うかね、それとも喜んでいいると思うかね。苦しみであったなら、そもそも外科医の世話にはなっていない。手足が切断されたとしても、それは喜ばしいことなのだ。

ラリー： 指が病気の状態だったならばという意味ですね。

スワミジ： そうだ。体の一部を失うことになっても手術は喜ばしいことだ。そうでなければ誰も医者には行かない。足を失ったとしても、必要な手術であったならばそれを苦しみとは呼べない。

ラリー： 壊疽<sup>えそ</sup>を起こしている場合はそうですね。

スワミジ： どのようなものであれ、手術を受けたことを苦しみとは呼べない。あなたの視点で何かを失ったからといって、それを苦しみとは呼べない。何かを失っても別の理由により喜ばしいということもあるのだ。

ラリー： しかし、総体が何かを失うことはないのではないですか。

スワミジ： 総体が苦しむことはない。総体に喜びや悲しみはない。総体は何もしていない。よって苦しみが生じるということはない。

ラリー： なぜ個体のヒトラーは苦しむのですか。

スワミジ： それは、まさに夢を見ている人が夢の中で蛾になるようなものだ。どのようにして夢を見ている人は夢の中で蛾になったのか。それを苦しみと呼びたければ、そう呼んでもよいだろう。人が夢の中で蝶や蛾になる。どのようにしてそのようなことが起こったのか。それを苦しみあるいは喜びと言えるのか。科学的な現象に対してそのような倫理的価値を使うことはできない。総体的存在に善や悪、喜びや苦悩というものはない。この世界にそのようなものは存在しない。あなたは数理的とも言える現象に対して、さまざまな個人的解釈をしているのだ。

この世界に喜びや悲しみはなく、あるのは状況に対する反応だけだ。あなたが、あなた独自の観点で評価しているにすぎない。観点を換えれば苦痛が喜びに見えたり、喜びが苦痛に見えたりする。絶対的な苦痛というものはなく、絶対的な喜びというものもない。その時々において、どの観点を重要視しているかという違いだけだ。喜びや悲しみが、それ自体で存在しているのではない。

ラリー： 第二次世界大戦中にガス室に送り込まれた人々は苦しまなかったのですか。

スワミジ： どのような苦しみであろうと、人々が苦しむのは意識が体につながられていたからだ。彼らの意識が体の外にあったとしたら、彼らは痛みを感じなかつたらう。例えば、死体は痛みを感じない。

ラリー： しかし彼らの意識を体につなげたのは、夢を見ている絶対的存在ではないですか。

スワミジ： 絶対的存在は何もしていない。あなたは再び総体の責任にしている。

ラリー： では、どのようにして意識が体につながられたのですか。

スワミジ： そのような質問をすべきではない。あなたは再び、なぜこのようなことが起きたのかという質問をしている。結果が原因に戻るまで、そのような質問の答えを得ることはできない。

ラリー： いずれにしても、意識が体につながっていた彼らは苦しみました。

スワミジ： 有限の体を持っているのだから当然苦しむ。意識が体から解放されたなら痛みを感じなくなる。人はガンジス川に死体を放り投げるが、死体は何の痛みも感じない。痛みの原因は意識にあり、行為や出来事によるものではない。

ラリー： 総体的な意識が…

スワミジ： 総体的な意識は喜びも悲しみもしない。常にそのままだ。

ラリー： 総体的な意識は個人意識の苦悩を感じないのですか。

スワミジ： 総体的な意識は苦しまない。総体的な意識の中では、木も木を切り倒す斧も同じ原理でしかない。誰かが何かを感じるということはありません。右手が左手を叩いているようなものだ。誰が誰を叩いているとは言えない。

ラリー： 選択肢のなかった7、8才の子供には…

スワミジ： 総体にとって子供等はない。それにとって、そのようなものは存在しないのだ。

ラリー： 個人という観点ではどうですか。

スワミジ： なぜここで「個人」を持ち出すのだね。そのような考えは心から排除すべきだ。私たちはここで、これまでの思考を肯定するのではなく、思考を改めようとしている。

ラリー： それは大人としての私の思考です。

スワミジ： 大人ではない。あなたは大人でもないのだ。あなたはこの宇宙のエネルギーの中で、時には強く、時には弱くなる圧点だ。その度合いが大きいときには大人、それほど大きくないときには子供と呼ぶだけだ。実際には子供や大人というものは存在しない。大人も子供も電気エネルギーとも呼べるものの圧点でしかない。私たちは人間の観点でしか思考をしかしないが、宇宙的な思考をする努力をしなければならない。

## 1990年12月13日午後

サラ： 人生において、この世界において、私の制限された意識で—私はそれを認識していますが—嘘偽りなく生計を立て、良き妻あるいは良き夫であり、そして愛情を持って行動するのはとても難しいことだと感じます。それが神から与えられた仕事、務めであるように思えます。私がなすべき仕事であり、私の目の前にあります。しかし、常に瞑想状態を保つようにするというのは… それが正しいことなのかどうかを…

スワミジ： 色々なことを言ったが、質問は何かね。

サラ： 自分の目の前にあるものが、神が私に与えた仕事のように思えます。

スワミジ： 神から与えられた仕事であろうと、あなた自身が選んだ仕事であろうと、仕事にどのような問題があるのかね。

サラ： ここでの話は、そのような現実には背を向けるべきだと言っているように思えるのです。生計を立てることも含めて、すべては夢でしかない。

スワミジ： 夢だからといって、それが非現実だとは言えない。夢もまた目で見ることができのだから現実だ。夢は非現実の現象ではなく現実なのだ。覚醒している世界との違いは意識の度合いだけだ。まるで存在していないかのごとく無視することはできない。存在しているのだ。幻覚であっても、あなたにそれが見えていて、それを信じている間は現実なのだ。完全に無意味なものであるならば心配に値するだろうか。

夢は目が覚めてはじめて非現実となるのであって、あなたが実際に夢を見ている間は非現実ではない。現実だ。夢の中で空腹を感じることもあるし、喉の渴きを覚えることもある。なぜ現実ではないと言うのかね。意識の中で経験されることはすべて、その時点では現実の経験なのだ。

二つの問題を混同してはいけない。あなたは二つの状況を対比しているが、比較や対照などすべきではない。それぞれを個別に考えなければならない。なぜ夢と目が覚めた状態を比べるのかね。経験している間はそれが現実なのだ。あなたが知覚するものはすべて現実だ。現実でなければ、あなたが知覚することはない。夢と呼ぶのは覚醒状態と比較しているからだ。比較などすべきではない。あなたの経験はあなたにとって現実なのだが、別の観点では非現実となる。

あなたの問題が私にとってはたわいない問題に見えたとしても、あなたにとっては非常に現実的な問題だ。比較はできない。「夢」という言葉は非現実性を意味しない。「夢」という言葉は、その状態を超越する他の状態があることを意味する。主体が他の経験によって超越されることを「夢」という言葉は表している。その状態が存在しないことを意味してはいない。それは存在しており、あなたの意識の中で存在している限り、それはあなたにとって、あなたに影響を与える現実だ。だからそれを夢と呼ぶことで実体のないものだと考えてはいけない。もし夢に実体がないとするなら、あなたの存在にも実体がないことになる。あなたも普遍的な万物の相互関係の一部なのだ。

あなたは一つ判断ミスをしている。あなたは自分は現実であるが、あなたが知覚する世界を夢だと考えている。しかし、あなたも夢と一緒に消えるのだ。あなたも夢と一緒に消えるのであれば、どこに問題があるというのだね。あなたは自分は現実だが、この世界は夢だと考える間違いをしている。実際はそうではない。この世界が非現実的なものであるなら、その中にいるあなたも同様に非現実的なものだ。そうだとしたら、いったい誰の問題について話しているのだろうか。問題自身が非現実的なものになる。思考の混乱がある。「夢」とは言わないように。その世界の中にいる間は、あなたにとって現実であり、その世界の法がすべてあなたに適用されるのだ。

サラ： 人生の目的はどうなるのですか。

スワミジ： 理論上の質問はともかく、あなたには現実的な問題があるのではないかね。理論上の質問があるのかね、それとも何か直面している問題があるのかね。

サラ： 瞑想に多くの時間を割いていますが…

スワミジ： 今は瞑想のことは忘れなさい。日々の生活において何か問題はあるかね。それともあなたは幸せかね。日々の生活に関係する質問をしているのかと思ったが。

サラ： 私の日々の生活のことです！今人生において一番疑問に感じていることです。

スワミジ： 何か問題があるのかね。それともあなたは幸せなのかね。

サラ： 私は幸せな人間でしたが、今の私は、知恵を得ることのできない自分に悩んでいます。

スワミジ： 落ちついて話しなさい。何をできないと言っているのだね。



サラ： 知恵を得ることです。

スワミジ： なぜ知恵のことを心配しているのかね。知恵のことなど考える必要はない。それによって、あなたの毎日の生活がどのような影響を受けるのかね。この世界で生きていくための知恵は十分持っているだろう。それが足りていないと言うのかね。あなたは何か問題を抱えているのかと私は聞いている。あなたは日々の生活、仕事、その他のことで何か苦しんでいることがあるのかね。それとも問題はなく、すべて良好なのかね。

サラ： 暮らし全般に問題はありません。食べることに不自由していませんし…

スワミジ： では、質問は何かね。

サラ： 私は自分がとても無知だと感じます。

スワミジ： どういう意味で無知なのかね。

サラ： 私には神がすべてだという見方ができません。

スワミジ： 教育過程によって徐々にそのような見方ができるようになる。人はなぜ学校に行くのか。それは教育を受けるためだ。10年間勉強すると知識が増え、理解が深まる。あなたに必要なのは教育なのだ。今のあなたは教育過程の途中にいる。教育によってあなたの理解が完全になるとき、あなたは正しい見方をできるようになる。最初の段階から、そのような見方をすることはできない。幼稚園や小学校の段階で「すべてを知りたい」と言っているようなものだ。必要とされる教育のために十分な時間をかけなければならない。やがてすべてを理解できるようになる。

サラ： 人生をこのまま生きていくことが教育過程なのですか。

スワミジ： 教育とは、ただ単に生きているだけのことではない。教育とは教育課程であり、それは意識の適応を意味する。有能な指導者の下で教育課程を用い、意識を適応させるのが教育だ。そうでなければ正しい思考を学ぶことはできない。自宅にいて正しい思考ができるのであれば、学校に通う必要などない。学校という環境には規律があり、教育のための合理化がされている。家では自分の好きなように思考できるが、学校では特定の思考が求められる。

「今の生活を続けていけばよいのか」とあなたは質問しているが、それでは駄目だ。あなたは今自分の好きに思考できる家庭という環境の中にいるが、正しい思考をすることが求められる教育環境で暮らす必要がある。それが教育、訓練であり、それには指導者が必要とされる。私たちには師の指導が必要だ。

サラ： 指導はアシュラムのような場所でしか得られないものですか。

スワミジ： アシュラムであろうとなかろうと、あなたに何の疑問もなく、すべてが明瞭でないかぎり、指導してくれる人が必要だ。

サラ： 人生における失敗を通して学ぶことで、正しい方向へ導かれるとは考えられませんか。間違いを犯すことで何が間違っていたかを学べると思うのですが。

スワミジ： それは試行錯誤による手さぐり法と呼ばれるもので、正しい教育方法ではない。穴に落ちてから穴に落ちるべきではないと学ぶわけだが、穴に落ちることを回避できるのに、なぜ落ちなければならないのかね。試行錯誤は教育システムではない。それでは皆穴におちて足を折り苦しむことでしか学ぶことができない。問題が起きて、そこから教訓を得るのではなく、不必要に問題を起こさないことを学ぶのが教育だ。健康になるために、まず病気になる必要はない。

どれだけ人生で苦労したとしても真の知恵を得ることはない。人生で起こり得る問題は数多く、一生の間にそれらすべてを経験することはできないからだ。試行錯誤だけが学習方法ではない。私たちは教育と呼ばれる精神的な修養によって学ぶのだ。そして教育には指導者が必要だ。一人ではできない。この数日間私たちは多くのことを話したが、あなたは、これまで話してきたようなことを聞いたことがないはずだ。町中でこのような話を耳にするだろうか。それが規律ある環境と自由な環境との違いだ。一般の人々は誰もこれまで話してきたような内容の思考をしていない。彼らは人生に何も問題はないと考えているのだ。

常に賢者や真摯な求道者たちとの交わり（サットサンガ）を持つことが大切だ。できるだけそのような人たちと交わるのだ。毎日サットサンガに参加することが無理ならば、折に触れてそのような修行が可能な場所に行くのだ。それも無理ならば神に祈るとよい。神の恩寵によって、あなたは自分の内に光りを見出すだろう。神はあなたの困難を知っている。真摯に祈れば神は必ずあなたの困難を取り除いてくださる。

サラ： それは利己的な願望ではないのですか。

スワミジ： 神を求めるのは利己的な願望ではない。神は自我ではなく、非自我を求めることを利己的な願望とは呼ばない。自我が非自我を求めることはない。そのようなことはあり得ない。自我が求めるのは自我であるが、神は自我ではない。よって神を求めるのは利己的な願望ではない。非利己的な願望だ。願望ではなく自己を超えようとする想いだ。自己を溶かし去ろうとする願望なので、願望の反対なのだ。神を求めるということは、自我を溶かし去りたいという願望だ。それは雪だるまが太陽の前に立つようなものだ。雪だるまが太陽の陽を浴びて存続することはできない。自我が、神あるいは神人を前にして存続することはできない。

サラ： 別の質問があります。

スワミジ： 質問しなさい。

サラ： ユダヤ教には神が人間と契約を結ぶという考えがあります。それは何を意味しているのでしょうか。

スワミジ： 旧約聖書に神との契約の話がよく出てくる。

サラ： 絶対的存在がどのようにして契約を結ぶことができるのですか。

スワミジ： ユダヤ教徒は神を絶対的存在だと考えていない。ユダヤ教徒にとって神は人間を超越する存在だ。この世界を超える存在であり、人間と接するように接することのできる存在なのだ。この世界を超越する神がセム系宗教における神の概念だ。これは四つのセム系宗教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ゾロアスター教に共通する。どのセム系宗教も神がこの世界を超える存在であり、契約や約束をしたり、祈りの対象としたりすることができる存在だと考えている。自分のボスと直談判するというわけだ。この世界を超える存在である神は、まるでボスのような存在なのだ。私たちは空を見上げて祈りを捧げる。なぜ神に祈りを捧げるとき空を見上げるのかね。それは、神がこの世界にいる存在ではないと感じるからだ。神は超越する存在であり、ここにいる存在ではないのだ。

それも宗教の一段階であり、何も問題はない。宗教のこの段階では神が帰依、信愛、服従によって加護を求めることのできる超越的存在だと考えられている。しかし、そのような考えが宗教のすべてではない。宗教には神と人の距離が縮まる段階がある。超越的な神の概念では、神と人間の上に大きな距離がある。神がどのくらい遠くにいる存在なのか私たちには分からない。そこには果てしない距離と時間がある。やがて神が超越的

な存在のみならず、たった今万物に内在する存在であることを受け入れることができるようになり、神との距離が縮まっていく。

神がそれまで考えていたような遠い存在ではなくなる。神は近い存在でもある。原子の一つ一つの中に神は存在している。これが宗教の第二段階だ。そして、神がすべての中に浸透しているがゆえに、あなたが神の外にいることはできないとするのが第三の段階だ。これらが超越性、内在性、普遍性という宗教の三つの段階だ。これら三つの段階はそれぞれ有効であり、それぞれ価値のあるものだ。これらは不十分な概念がより完全な概念へと変化していく発達段階なのだ。なのでどの宗教にも問題はない。より高度なものへと上昇するための異なる段階なのだ。

**サラ：** ユダヤ人には自分たちが世界の他の人々とは違う選民だという考えがあります。それはいったいどういう意味なのでしょう。なぜそのような考えを持つようになったのでしょうか。

**スワミジ：** それも一つの思考段階だ。神の信者は、信者でない人たちを下に見ることがある。あなたが敬虔な神の信者だとしたら、無神論者のことを自分よりも劣っていると感ぜないかね。そのように考えるべきではないと分かってはいても、どうしても無神論者である非信者よりも自分のほうが上だと感じてしまう。そのような考え方に正当性があるかどうかは、あなたが判断するしかない。

聖人が不信心な人たちのことを不幸な人間だと思うとしたら、その聖人の考え方は正しいと言えるだろうか。正しいかもしれないし、正しくないかもしれない。それも一つの見方だ。敬虔な神の信者であるゆえに自分たちが選民だと感じることも、ある種の理にかなったことなのかもしれないが、他の人たちが自分たちよりも劣った人間であるとする考えが正しいかどうかはまた別の話だ。

**サラ：** しかし、特定の人々が特定の役割を担う、人々は平等だが異なる役割がある、そのような考え方は正しいのでしょうか。

**スワミジ：** 皆それぞれに役割がある。しかし、それは人々に優劣があることを意味しない。

**サラ：** しかし異なる役割はあるのですね。

**スワミジ：**異なる役割と立場がある。各人それぞれが人生における異なる立場におり、あなたが置かれている特定の立場という観点であなたの仕事が決まる。仕事に優劣はない。あなたには、あなたの仕事が適しており、他の人には別の仕事が適している。お店の経営が農業より優れている、あるいは農業の方が商売をしている人よりも優れているとは言えない。両者とも社会の安定に必要な異なる職業に就いているのだ。人に優劣はない。

皆自分が置かれた立場に応じた役割を果たさなければならず、比較はできない。実際、特定の人々だけが選ばれているのではない。皆が選ばれている。皆が神の子だとしたら、選ばれていない人がいると思うかね。神の子ではない人々がいると考えるのであれば別だが。

**サラ：** 宗教の儀式についてはどうですか。

**スワミジ：** 儀式は不可欠なものだ。儀式とは内なる気持ちを表現するためのものだ。「ありがとうございました。またよろしくお願ひします」と言って会釈するのはなぜか。口に出さなくても心でそう考えて、去ればよいではないか。なぜそうしないのか。言葉や仕草によって内なる思いを表現しているのだ。儀式は必要だ。私たちが「行う」ことはすべて儀式であり、内なる感情や思考を表現したものだ。あなたの本質は霊であり、あなたのすることが行為であり儀式だ。

**サラ：** ユダヤ教には特別なパンを食べたり、割礼をしたりする儀式があります。これらは私の気持ちを表すものではありません。

**スワミジ：** それらも一種の儀式であり、何らかの意味を有している。神への愛、神を崇拝する気持ちを表しているのだ。さまざまな表現によって神に対する信心や崇敬の念を表すことができる。パンやバナナ、あるいは何を使おうと、それは問題ではない。すべては社会状況や文化的背景が影響することであり、そのような儀式に問題はない。儀式は宗教の一部であり、完全に避けることはできない。自分の感情を表現していないと感じるのであれば、別の儀式をすればよい。

**サラ：** なぜ神を愛することは、これほど難しいのですか。

**スワミジ：** それは神を知るのが難しいからだ。見たことも考えたこともないものを愛することができるだろうか。目に見えるものは愛せても、見えないものを愛することができるだろうか。それが問題なのだ。私たちには神を心に思い描くことが難しい。だか

ら感情が神に向かないのだ。意味のあるものが愛の対象であり、無意味なものが私たちを引き付けることはない。まずは神を知る必要がある。

サラ： 世界を神から遠ざけようとしているものは何ですか。スワミジは、世界は絶対的存在に向かっているとされました。しかし、この世界には絶対的存在に向かうことを阻む力もあるように思えます。秩序ではなく無秩序に向かう、エントロピーと呼ばれるようなものです。

スワミジ： これまでずっとその話をしてきたのだがね。絶対的存在から私たちを遠ざけるのは、全体から分離した一部が独立した完全体だと主張することだ。

サラ： 個体が独立した完全体だと主張することが絶対的存在への動きを阻んでいるのですか。

スワミジ： その通り。

サラ： それが、私たちが神を愛し、神へと向かうことも妨げているのですか。

スワミジ： そうだ。しかし、そのような状態はずっとは続かない。独立を主張しているものも、より高次の力によって打ち負かされるときが来る。これが宗教の歴史における神と悪魔の戦いと呼ばれるものだ。神学的叙事詩などで神と悪魔の戦いについて聞いたことがないかね。

サラ： あります。

スワミジ： 神も悪魔も私たちの目の前にいる。悪魔が自我であり、神が普遍的な力だ。いつの日か悪魔は宇宙の力に破壊され、全体の一部である私たちは放蕩息子の話のように神に迎え入れられるのだ。私たちは皆放蕩息子だが、神は私たちの味方であり敵ではない。たとえ私たちが神に背を向けても、神は私たちを愛している。全体は部分を愛せざるを得ないからだ。父親は自分の一部である放蕩息子を愛さずにはいられない。全体は部分を完全に含むものであるゆえに、どれほど離れていたとしても最終的には迎え入れられるということを放蕩息子の話は示している。

サラ： 非常に困難なことに思えます。

スワミジ： それは自我が強固だからだ。どうしても自己の主体性に固執する。これが聖書に出てくるルシファーだ。ルシファーは自我を表している。神に背を向けて墮落させられた悪魔だ。私たちも宇宙の完全性から墮落した。しかし救われ<sup>サタン</sup>ないことはない。部分は全体と一体であるゆえに永遠の罰というものはない。最終的に墮落というものはなく、みな神に戻るのだ。

サラ： どのように自我に対処すればよいのですか。自我はとても強固です。神より強いように思えることさえあります。

スワミジ： その通り。自我の力は、ときに神の力に勝るように見えることさえある。(笑)しかし、「見える」だけだ。夜の暗闇が太陽の輝きを制圧しているように見えるようなもので、いずれは神が勝利する。

サラ： 私たちに何かできることはありますか。

スワミジ： あなたはここに来たことで、すでに何かをしている。こうして徐々に自我を浄化するのだ。あなたの自我は数日間ここにいたことでかなり浄化されている。今のあなたは以前よりも良い人間になったと思わないかね。このようにして徐々に真理に近づいていくのだ。神に到達するには時間を要する。そして真摯な求道心が重要な要素となる。真摯に求める気持ちが不可欠だ。単なる理論あるいは学究的な問いかけとして求めているだけでは駄目だ。

「真理に到達できれば素晴らしいし、到達出来なかったとしても、それはそれでよい」といった姿勢では駄目なのだ。「私はかならず神に到達する」と決心していなければならぬ。確固たる想いは必ず成就する。必要とされるのは、求めることだけだ。「求めよ、さらば与えられん」。求めれば与えられる。しかし、魂から生じる求道心でなくてはならない。あなたの魂が求めるとき、それは必ず与えられる。疑いの余地はない。

お店で何かを買うよりも神の恩寵を得ることのほうが容易だ。買い物をするためにはお店に行かなければならない。しかし、神に到達するのに移動する必要はない。必要なのは、心の底から込み上げる真摯に神を求める気持ちだけだ。求めること以外に必要とされる条件も資格もない。あなたが求めさえすれば必ず与えられる。それだけだ。それ以外に必要なものはない。

サラ： しかし、心理的な障害があると感じる場合があります。神に到達することを望んでいないのではないかと思うことさえあります。

スワミジ：誰も神を求めないわけにはいかない。

サラ：神を求めたくないと思うことがあります。何か美味しいものでも食べているか、楽をしたいと感じるのです。

スワミジ：誰も食べるのが悪いとは言っていない。「神を愛し、そして好きにせよ」という古い諺がある。ジャムやクッキーを食べても問題はない。誰もそれを咎めはしない。ただし、神を愛していなければならない。

サラ：しかしスワミジ、神を求めることを阻止する何かがあるように感じるのです。

スワミジ：障害があると気づいているということは、それが本当の障害ではないことを示している。私たちの自我はとても厄介なものだ。

サラ：しかし、障害は本当にあるのです。

スワミジ：障害に気づくということは、それは障害ではないのだ。障害は徐々に無くなっていく。心配しなくてよい。大丈夫だ。日が昇るわずか2時間前でも空は真っ暗だ。しかし暗闇は必ずなくなる。暗闇のなかにいると明るい世界があることなど考えられないかもしれないが、必ず夜は明ける。同じように、すべての間違いは消えてなくなる。すべてなくなるのだ。あなたは、それがなくなったことに驚くだろう。悪夢が消えるように消え去るのだ。しかし、あなたはそれを求めていなくてはならない。

サラ：私は慈善のための資金集めをしたりしていますが…

スワミジ：どのような活動をしていようと構わない。誰もそれに反対はしない。ただし、心は神にあらねばならない。そして、その心ですべての活動をするのだ。

サラ：自分の心は神にあると思っ込んでいるだけではないかと思うことがあります。自我による迷妄でしかないのではないかと。

スワミジ：神を求めるようになりたいという気持ちがあれば、それで十分だ。神は自我やあなたが言う迷妄の背後にもある実在だ。神を否定するのは自分を否定することになる。



サラ： 私が想像する神でしかなく、私が想像する神への愛でしかなくても、それで十分なのですか。

スワミジ： 真摯な想いは必ず実現する。一つのもの以外に何も求めているのであれば問題はない。神を求めるとは、一つのものだけを求めるとのことだ。二つを求めることはできない。あなたがそれだけを求めているのかどうかによって、あなたが求めているものが神なのかどうか分かる。もしそれ以外にも何か求めているものがあるのなら、あなたが愛しているのは神ではない。このようにしてあなたの神に対する想いが本物であるかどうかを知ることができる。

また、神はすべてに浸透する普遍的な存在だ。あなたが求めているものは普遍的なものなのかね、それとも一つの場所に存在しているものなのかね。もし局在するものを求めているとしたら、それは神ではない。普遍的な存在を求めているのであれば、それは神だ。自分が求めているものが普遍的な存在なのか、それともどこかに局在するものなのかを考えてみなさい。そうすることで正しい判断ができる。

サラ： もし私が求めているものが、局在しているものだとしたらどうなりますか。

スワミジ： それは間違いだ。それを求めてはいけない。体全体を求めずに、一部分だけを求めていることになる。

サラ： ありがとうございます。

スワミジ： 世界には主な宗教が 11 ほどある。ヒンズー教、仏教、ジャイナ教、シーク教、ゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、道教、儒教、神道。その他にも、異なる宗教と考える必要のない小さな宗派がある。また、イスラム神秘主義のスーフィズムやキリスト教神秘主義といった、主要な宗教を細分化するものもある。これらの宗教をすべて研究することで、人間が究極的実在を知るためにとる宗教的アプローチのパターンがいくつか見えてくる。どの宗教でも問題はないが、異なる宗教を比較すると興味深いものが見えてくる。

宗教はすべて一つの頂上に通ずる多数の道のようなものだ。最終的に行き着く先は同じなのだ。もしこれを受け入れることができたならば、世界の宗教間に友愛が生まれる。しかし、それぞれの宗教が、その宗教だけが真実のすべてを示していると主張して孤立する。また他の信仰を否定するという傾向を持っている。その結果衝突が起き、社会的

および政治的な惨事へとつながっていくのだ。世界にある多くの宗教は、<sup>あまた</sup>数多ある太陽の光のようなものだ。太陽の光が互いに張り合ったとしたら、いったいどうなるかね。

他者の信仰の妥当性を容認するだけではなく、その努力の正当性を受け入れなくてはならない。上から目線で容認しているだけではだめだ。他人の観点をしぶしぶ我慢するのではない。それでは優越感に浸っているだけになる。すべての宗教には妥当性がある。子供はたわいないことしか言わない、とは言えない。子供は子供なりに、その時自分が置かれている状況の中で不可欠なものを求めているのだ。それをもって子供が天才よりも劣っているとはならない。比較ほど不愉快なものはない。不毛な比較などすべきではない。すべてをありのままに受け入れるのだ。

ラリー： 私が理解できないのは、私が信仰する宗教にせよ、他の宗教にせよ、賢明で知性ある人々がいるにもかかわらず…

スワミジ： あなたもそのような一人だ。

ラリー： ありがとうございます。しかし、自分の宗教について一番よく分かっていますが、なぜこれほど多くの人たちが、自分の信仰だけが正しい道だと考えるのか理解できません。

スワミジ： それが問題なのだ。私たちに必要とされる寛容さが欠如している。他人を思いやることができずに、なぜ人々を「神の子」と呼ぶのかね。

ラリー： 彼らにも他人に対する思いやりはあるのですが、モーゼが神から直接言葉を受け取ったので、ユダヤ教徒にとっては、その言葉が神の意志を表す絶対不変で唯一のものだと考えるのです。

スワミジ： これは西洋の宗教すべてに共通する考え方だ。セム系宗教と呼ばれるものだが、彼らが持つ神の概念は超越的なものであり、そのためこの世界が神から切り離され、世界はできるだけ早く逃避すべき悪魔の巣窟だという解釈がされてしまう。極端な禁欲主義や修道院生活の類、あるいは自己非難が生じるのはこのためだ。自己の存在自体を悪と見なす自己非難に至る禁欲主義さえある。悪魔が活動する世界に墮落してきたというものだ。地獄に墮ちることを余儀なくされる人々がいると考えるのは非常に残念なことだ。インドにもこの種の神学的教義はある。

インドでも、人々の中には永遠の救済の対象となる人、永遠の煉獄<sup>れんごく</sup>の対象となる人、永遠に救われない人がいるという奇妙な考えをする人たちが存在する。嫌悪感を抱かせる考え方だ。彼らの神は、永遠に地獄にいる人、永遠に天国にいる人、そして永遠に輪廻を繰り返す人を作るのだ。神はそのような三種の分類を作らない。神が邪悪な罪人を作る一方で、神自身はそれらに汚されない超越した存在であるというのは、宗教的な曲解だ。その結果、この世界における邪悪なものとの関与を排除しなければならないという問題が生じる。もし魂が罪人であったなら魂が救済されることは決してなく、もし救済が可能であるならば魂は罪人ではないのだ。そのような神学には矛盾がある。不十分な宗教だ。

誰かを憎むことで神を愛することはできない。宗教には誤解がある。神を愛して世界を憎めと言っているのだ。なぜ世界を愛して神を憎むとはならないのか。そのように感じている人たちもいる。すでに言ったように宗教には超越的、神秘的、普遍的という段階がある。すべては普遍的な段階へと向かっている。宗教の比較は有益であり必要だ。

**サラ：** すべての道は同じところに行き着くと言われました。それぞれの道のやり方に忠実に従うことは重要ですか。

**スワミジ：** あなたが前進していく助けとなるものは、すべて従うべきだ。

**サラ：** それをどのように判断すればよいのですか。

**スワミジ：** あなたのガイドであり、求道者そしてまた目標である、あなたの魂<sup>こころ</sup>が教えてくれる。たとえば食事にしても、自分が何を必要としていて、何を食べなければならないか分からないかね。二十の食品がお皿に載っているとき、それらすべてを食べるかね。自分がどの食品を必要としているかは自分で分かるはずだ。その時のあなたの感覚、あなたが必要としているものが、あなたに何を食べるべきかを教えてくれる。あなた自身が判断するのだ。

**サラ：** そのような判断は、自我が楽な道を選択しているだけということはないのですか。

**スワミジ：** 神を普遍的存在として愛するとき自我が生じることはない。そこに自我はない。あなたは、あなたが求めている普遍性という観点で物事を見なければならない。自我は非自我の前で存続することはできない。神が自分の傍にいて、自分を見ていると心で感じなくてはならない。その時あなたはどのように行動するのか。もし神があなた

を見ていて、あなたも神があなたを見ていることを確信しているとしたら、その時あなたはどうするかね。何か間違っただけをしようか。その時あなたがする選択はすべて正しいものだ。だから、神の近くにいると感じなくてはならない。実際今もあなたは神と共にいる。あなたはその事実を受け入れていないだけなのだ。神は常に無数の目であなたを見つめている。それを知るとき、あなたはどのような行動をするのか。その時のあなたの行動があなたの宗教だ。神の面前であなたがすること、それが宗教だ。

1990年12月14日午前

ラリー： ここに来てとても良かったです。今日は一つだけ質問があります。

スワミジ： 徐々に質問が減ってきたのだね。それは良かった。

ラリー： それはどうでしょうか。どのように質問してよいか分からなくなってきたのかもしれませんが。今日の質問は「なぜこのようになったのか」という質問です。また、そのような質問はすべきでないと言われるかもしれませんが。ここ数日スワミジの話を聞いてきましたが、いったいどのようにして私は今の私になったのでしょうか。

スワミジ： あなたは何にもなっていない。あなたは、あなたのままだ。もし実際に何か別のものになっていたのなら、その後別のものにはならなかつたらう。あなたが何かになることができるということは、「なる」という言葉の意味を修正する必要がある。もしAがBになったのであれば、その後BはAになることはできない。AがBになることは決してなく、AはAのままだ。もしあなたが人間になったのであれば、あなたが神を実現することはありえない。あなたに起きてしまったことを否定することはできない。神の実現では、そこにはないものではなく、そこにあるものを肯定しているだけなのだ。すでに自分を必滅の存在に変えてしまったなら、その後不滅の存在になることはない。

あなたは、それがすでに起きたことだと主張している。私はそのようなことは起きていないと言っている。あなたは、そのようなことは起きていなくと確信すべきなのだ。あなたの運命はあなたの掌中にある。しかし、すでに「自分は愚か者だ」と考えているのなら、自分が信じていることと反対のことを主張しても賢者にはなれない。自分を否定することはできない。

ラリー： ただ、質問は、どのようにして…

スワミジ： どのようにしてとは何だね。あなたはもう分かっているはずだ。

ラリー： しかし、どのようにして私は自分が愚か者だと考えるようになったのでしょうか。なぜ自分がちっぽけな存在だと考えるようになったのでしょうか。これは非常にショックなことです。

スワミジ： それは自分自身に聞くとよい。自分はなぜ間違いを犯したのかと聞いているが、あなたの間違いなのだから自問すればよい。誰もあなたに間違いを犯せとは言っていない。いずれにせよ、そのような質問は無意味だ。あなたは、あなたの本質ではないものが存在すると思っているだけなのだから。

ラリー： それが質問なのです。どのようにして、私はそのように思うようになったのでしょうか。

スワミジ： 夢で何かを見るのと同じだ。

ラリー： 私の考えはこうです。私は赤ん坊としてこの世に生まれてきたように見えた。そして自分の外にいる多くの人たちに世話をされ、教育を受けることができたように見えた。

スワミジ： そのように見えたとしても、それがどうしたというのだね。あなたは、それにどのような影響を受けているのかね。夢でも同じことが起きている。夢の中の体験をどのように判断するというのだね。現実なのか、それとも非現実なのか。

ラリー： 私は徐々に赤ん坊から子供へと成長していきました。

スワミジ： それらのことが起きたからといって、あなたにどのような影響があるのだね。

ラリー： これらのことが、私が有限で必滅の存在であるという考えの裏付けとなります。

スワミジ： しかし、それはあなたが有限ではない裏付けでもある。

ラリー： どういう意味でしょうか。

スワミジ： 背後に無限の意識がなければ、自分が有限だと意識することはできない。有限の意識が自分が有限だと知ることができない。有限であるという意識自体が、有限を超えるものの意識があることを意味している。含意する方向が、あなたが考えているのとは逆なのだ。有限だという意識が有限ではないものの存在を含意しないかぎり、有限だと意識することはできない。そうでなければ誰が有限を考えているというのかね。有限な存在が有限な存在を知ることができない。

ラリー： それは分かります。

スワミジ： これ以上に言うことはない。なぜ納得できないのかね。

ラリー： 私は過去について考えています。

スワミジ： 過去などない。無限に過去はない。

ラリー： では、私の考えはどこから来るのですか。

スワミジ： 無限なるものからだ。

ラリー： 有限であるという私の考えがですか。

スワミジ： そうだ。有限であるという考えも無限の一部でしかない。無限の外にあるのではない。なので有限であるという考えにこだわる必要はない。何が問題なのかね。無限が有限になったと考えているのだ。天才が自分のことを四つん這いする赤ん坊になったと考えるようなものであり、それで天才が何かを失うことはない。無限の存在が有限の存在のように見えるだけで、無限の存在は自分が有限ではないことを知っている。賢者は愚者の役を演じることができるが、本当に愚者になったわけではない。愚者の「演技」をしているだけなら問題はない。しかし、あなたは本物の愚者なのかね。そこが問題だ。本物の愚者であってはならないのだ。

ラリー： しかし、一時的に愚者だった賢者も、なぜ一時的に愚者だったのか知りたいたいと思うと思います。

スワミジ： 賢者がそのような質問をすることはしない。もしそのような質問をしたら、賢者ではなく愚者のままなのだ。このような質問をするよりも、自分の病のために何かを実践すればどうかね。

ラリー： 私なりに努力しているのですが。何か飲み薬はいただけないでしょうか。（皆笑う）

スワミジ： あなたの病に対する薬をあげたのだが、あなたはこの薬は誰が作ったのですかと聞いている。薬の代金も必要ない。誰がその薬を作ったかなど、どうでもよいことだ。それよりも薬を飲むべきなのだ。

ラリー： しかし薬が効くまで時間が必要です。

スワミジ： 薬だと認識していれば効果はすぐ現れる。そうでなければ医者に診てもら  
う意味がない。実践が重要だ。ヨーガは単なる理論、学問ではなく実践だ。いったん理  
解したら実践に専心しなくてはならない。それだけだ。あなたは理解しているのだが瞑  
想していない。まだ瞑想を始めていないのだ。

真理への道には三つの段階がある。まずは話を聞く、次に聞いたことを瞑想する、そし  
て瞑想の対象に没入し、それになるのだ。知識は単なる知識ではなく、あなたの存在そ  
のものにならなくてはならない。知識を有しているのではなく、あなた自身が知識とな  
るのだ。あなたは知識の生きる権化となるのだ。あなたは常にあなた自身の本質を肯定  
する意識の状態にいななければならない。その後は好きにすればよい。瞑想は数分すれば  
良いというものではない。明けても暮れても意識をその状態に保つのだ。活動ではない。  
今は夜ではなく昼間だと考える必要がないように、通常の思考から切り離せないものだ。

ラリー： 聞いたことを沈思黙考するのも一つの瞑想だと考えられますか。

スワミジ： もちろんだ。

ラリー： 尋ねる価値のある質問はありますか。

スワミジ： 無限なるものを求める気持ちが確かなものになったなら質問をすべきでは  
ない。質問があるということは煮え切らない気持ちだということだ。あなたがこれまで  
に理解したことで十分だ。これ以上に知る必要はない。考え過ぎるのは時間の無駄だ。

ラリー： なぜこのようなことが起こるのかを理解できれば…

スワミジ： 知ることは出来ない。不可能なことだ。人間が人間を超えることを知るこ  
とはできないのだ。結果が原因を知ることはできない。方向が逆さまだ。無意味な質問  
だ。結果が原因を知ろうとしているのだが、結果が原因と一つになるまで原因を知るこ  
とはできない。要は、結果は原因と一つにならねばならず、それを達成するために必要  
なあらゆることをするのだ。そうすればすべての疑問に対する答えを得て、原因が何を  
していたかが即座に分かるようになる。答えは結果ではなく原因にある。結果が答えを  
得ることができないのは、結果が原因の外にあるからだ。どのような答えを得ることが  
できるというのだね。



ラリー：たとえばユダヤ教など西洋の宗教は、天地創造には目的があると言います。

スワミジ：目的を言うだけなら私にも言える。神に目的があると言うとき、あなたは神に欲望があると言っているのに等しい。すると神は私たち人間と同じような存在となる。神に目的を課しても私たちが得るものはない。神の国に私たち自身の偏見を押しつけても得るものは何もない。それなら神には家族があるということもできる。子供がいて宮殿で暮らしていると。そのような考えをする宗教もある。そのような考えは単に自我を満足させるためのものであり、最終的には何ももたらさない。宗教意識という玩具をもてあそぶことはできるが、玩具が真の満足をもたらすことはない。私たちは思想をもてあそぶのではなく、苦しみから解放されることを考えており、そのためにはいい加減なアプローチでは駄目なのだ。真剣に取り組む必要がある。目的があるという考え自体が神をこの世界から遠ざけ、また神を神の存在から遠ざける。

ラリー：予言の記録はどうなるのですか。

スワミジ：それらも時間と空間を持つ経験世界のものでしかない。

ラリー：モーセやイエスなどの預言者は…

スワミジ：どのような預言者も宇宙全体の働きの中にある。夢の中で経験するものには価値があるように、預言者にも同様の価値がある。すべての経験は<sup>リアル</sup>現実であり、そうでなければ経験ではない。

夢もまた<sup>リアル</sup>現実だと言った。ただし、より低次の現実だ。あなたが目にしているものは全て相対的な現実性を持っているが絶対的なものではない。夢の中で得た富も、夢の中ではあなたに満足をもたらす。その満足に偽りはなく、<sup>リアル</sup>現実だ。よって夢が非現実だとは言えない。同じように、この世界で起こることのすべてが<sup>リアル</sup>現実だ。しかし、この世界の状態を超える、さらなる目覚めた状態があり、その状態はこの世界を一瞬で消し去り、この世界の現実はより高次の現実に含まれるのだ。

より低次の現実是非現実ではない。しかしながら、「より低次」という部分を明確に意識しなくてはならない。赤ん坊としての存在は非現実ではないが、その状態からすでに成長した大人にとっては不要なものだ。この世界のものは全て現実なのだが、その現実性には度合いがある。より高次の現実が低次の現実を包含する。高次の現実が低次の現実を包含、超越するのだから、私たちは低次の現実だけに永遠に執着してはならない。

すべての観点はその観点において正しい。あなたが言っていることも間違いではないのだが、一つのレベルにおいてであり、すべてのレベルではない。

ラリー： 普遍性がすべてを超越するということですか。

スワミジ： 普遍性がすべてを超越し、すべてを包含する。超越は何かの否定を意味するのではない。特定の現実を否定することで神に到達するのではない。私たちは、私たちが考えている以上のものを手に入れるのだ。一般に言われるように、神に到達するためにこの世界を放棄するのではない。この世界を放棄などしない。より完全なる包括性のために、この世界のより低次の特性および不完全な形態を放棄するだけだ。

私たちが一般的に考えているような意味での放棄というものはない。この世界の現実を放棄するのではなく、不完全さを放棄するのだ。神を求めて「放棄」し、僧侶や隠者になることはできる。しかし放棄を正しく理解していなくてはならない。「放棄する」と言うとき、いったい何を放棄するのかね。建物や壁を放棄するわけにはいかない。あなたの所有物ではないのだから。自分の所有物でもないものを、どのように放棄するというのか。

より高次の、より包括的な達成のために、不完全な観念を放棄するだけだ。より包括的な意識のために低次の意識を放棄するのである。よって、それはより高い意識の領域への成長であり、そのような放棄で私たちが失うものは何もない。しかし、通常私たちが口にする放棄では、まるでお金や土地、家族等を失ってしまったように見える。これは放棄の間違った理解である。真の放棄とは、意識から意識の外在化のあらゆる形態をなくすことである。

家を出てここに来たとしても、家を放棄したことにはならない。家が消えてしまったわけではなく、そのままだ。放棄しなければならないのは、あなたが持つ観念だ。この世界は観念でしかない。大いなる観念だ。宇宙は最終的に一つの観念だ。物質ではない。固体は存在しない。宇宙で働いているのは観念だけだ。これは、実在しているのは観念、普遍的意識であるとしたプラトンの考え方と一致している。

しかし、誰もこの真実を受け入れることができない。この宇宙は観念でしかないと言っても、それを理解できる人はいない。このような考え方を少し学んだだけでは不十分だ。本当に理解できる人は誰もいない。このようなことを言っても、皆単なるナンセンスを口にしていてと思うだけだ。

在るのは一つの想念だけ。それだけだ。どこにもそれ以外のものはない。それが「在る」だけだ。それが意識・存在と呼ばれるものだ。想念がチット・サットだ。建物、星、宇宙全体といった固体性は、シェイクスピアが「夢と同じ物で作られている」と表現したもののの中に溶け去るのだ。

夢の中でそびえ立っていたロッキー山脈も夢から目覚めると、たちどころに消えてしまう。この世界についても同じことが起こるのだ。これらすべては一つの思考に溶け去る。それを神と呼んでもよいだろう。これがヴェーダのメッセージであり、ウパニシャッド、バガヴァッド・ギーターのメッセージ、そしてまたすべての宗教が最終的に宣言することだ。

「初めに神は天と地を創造した」と創世記は言うが、天と地を創造する前の神はどのような存在だったのか。神は想念、観念、意識、存在だったのだ。この世界なしの神を考えてみるのだ。神は天地創造の前にも存在していたはずだが、その神の存在とはどのようなものだったのか。神はどこに座っていたのか。神には座る場所もなかった。空間が創られたのは後になってからだからだ。では天地が創造される前、神はいったいどこにいたのか。

質問が生じる余地もない。在ったのは純粹なる観念であり、それが神だ。意識と呼んでもよい。これ以上に言えることはない。存在・意識、サット・チット、対象のない思考—哲学者たちはこのように表現する。一つの想念、一つの観念、一つの至高者が在る。これを心の底から確信できるようになりなさい。あなたが他に必要とするものは何も無い。

1990年12月14日午後

スワミジ：考え方自体に違いがある。西洋思想では常に経験的な側面が重要視される。経験的という意味が分かるかね。「経験的」という言葉には客観的、五感による知覚本位、外部の影響を受ける、そしてまた社会的な意味合いを持つといった考えが含まれる。重要視されるのは外の世界、個人、五感による知覚だ。東洋で重要視されるのは普遍性、包括性、超越性、統一性だ。昨今は徐々に両者の溝がなくなってきているが。

しかし、今も溝は存在する。以前コーネル大学の哲学教授と話をしたことがあった。哲学書の著者でもある哲学者だが、この教授がこう言った。「私自身がなくなるのであれば、絶対的存在と一つになることにどのような価値があるのでしょうか。スワミジ、違いますか。私がいなくなるのであれば、誰が絶対的存在を経験するのですか」。哲学科の教授であり、学部長でもある人がこのような疑問を持ったのだ。つまらない考えだと切り捨てることはできない。核心をついた質問だ。しかし、熟考すれば無意味な恐怖だということが分かる。

誰も「そこ」にあなたの存在がなくなるとは言っていない。あなたは存在する。しかし、存在しなくなってしまうかのように見えるのだ。求道者、修行者、僧侶、修行僧など、誰でもよいので質問してみるとよい。皆完全に納得することができないでいる。誰も溺れるような苦しみは避けたいと思うものだ。たとえそれが甘露の海であっても「溺れる」という言葉は聞きたくない。恐怖を感じるのだ。

死後自分の体が冷たいガンジス川に流されることを心配する人がいる。冷たい水は嫌だ！「今は冬だから死にたくない。ガンガーの水が冷たい。死ぬなら夏のほうがよい」と言っていた高齢のスワミがいた。何を馬鹿なことを言っているのかと思うかもしれないが、肉体に対する意識の強い執着がこのようなことを言わせるのだ。この体をガンガーに流すとは！息が出来ないし、冷たい！あなたは「なぜこのような馬鹿げたことを言うのか。死後そのようなことは関係ない」と言うかもしれない。しかし、そのような問題があるかのように感じるのだ。

今この体につながっている意識が、未来の状態に移入されるのだ。その時意識は体になく、体は単なる亡骸でしかないにもかかわらずだ。神実現に対する畏怖についても同じことが言える。神の実現に到達した後あなたはどうなるのか。自問してみるのだ。こんな風に皆答えに詰まってしまうだろう。[スワミジが仰天した様子を身振りで表現する]（皆笑う）いずれこの問題に直面するときが来る。多くの苦勞、瞑想を経て神を知ろう

としているのだが、神に到達した後あなたはどうなるのかね。これによって肝心なことがどれだけ明確に理解できているかが分かる。

私たちの前には暗幕が垂れており、その先が見えない。そして私たちは、その暗闇の中を手探り状態で修行、瞑想等をしている。瞑想は暗闇を手探りで進むようなものであってはいけない。光の中を歩むものでなくてはならない。

1990年12月15日

ラリー： シャンカラチャーリヤは普遍性について話しましたか。

スワミジ： シャンカラチャーリヤはすべてについて語った。彼が言及しなかったことは何もない。あなたが心で考え得ることのすべてを、シャンカラチャーリヤはすでに考えている。哲学の分野において、あなたがシャンカラチャーリヤの言葉に付け足せる言葉は一つもない。

ラリー： ソロモン王は「日の下には新しきものなし」と言いました。

スワミジ： 哲学者のホワイトヘッドは、私たちが何を言っても、それはプラトンの教えに脚注を付けるようなものでしかないと考えた。プラトンはすべてについて書いたと言うのだ。同じことがシャンカラチャーリヤについても言える。

ラリー： スワミジ、何かアドバイスをいただけますか。

スワミジ： この数日間に、すでにアドバイスを与えたではないか。会話の中で私が話した内容があなたへのアドバイスだ。私を与えたアドバイスは、あらゆる状況、出来事、人に当てはまるものだ。すべてに効くオムニバスな万能薬だ。

サラ： 私の中には神を求めることを拒む部分があります。神を求めている自分がいるのですが、怠惰が原因だと思います。これを克服する方法はありますか。

スワミジ： 怠惰が原因ではない。心が対象物の価値と同じレベルにない限り、その対象物の価値を理解することはできない。牛と金のネックレスのたとえ話をしたと思う。金のネックレスに価値がないわけではない。牛にその価値が理解できないだけだ。価値を理解するには、それに適した心が必要だ。自分に必要のないものを欲することはない。あなたのニーズがすでに他の手段によって満たされているのであれば、あなたが他のものを不必要に求めることはない。

心は肉体および社会関係に関与しており、物質的および社会的な食物を必要とする。あいにく神は肉体的でも社会的でもない。私たちの今のニーズは物質的および社会的、そして心理的なものだ。神はこれらのどれでもない。このようなニーズしか持たない私たちを、神はどのようにして引き付けることができるのか。もしあなたが単なる物理的な

存在、社会的な単位、あるいは思考する心ではなく、本体論的存在であるならば、そのような問題や疑念、恐れはなくなる。

ラリー： 「本体論的」とは「存在」という意味ですか。

スワミジ： 「本体論的」とは「純粹なる存在」という意味だ。私たちは、純粹なる存在からしか満足を得られなくなったときにはじめて神への愛、神を求める気持ちを感じるのだ。あなたの純粹なる存在は肉体的、社会的、心理的、そして政治的な関係性という瓦礫がれきの下に埋もれているために行動できない。つまり、私たちの奥深くに埋もれているものにしか感じられないものであるため、その必要性を感じるができないのだ。

今の私たちは完全に自分自身ではない。不完全な状態なのだ。私たちは自分の人格のごく一部、氷山の一角のような部分で思考している。より大きく重い、見えない部分は顕在意識の下にある。私たちの真の人格は顕在意識のレベルよりも深いところにあるが、私たちは顕在意識のレベルでのみ生きている。したがって、私たちは本当の私たちとして生きていないのだ。そのため、今の私たちは神を求めようとしない。

これがあなたの質問に対する答えだ。しかし、顕在意識や潜在意識、無意識のレベルよりもさらに深く進むと、形而上学的レベル、純粹な存在のレベルに到達する。そうするとあなたは神しか求めなくなる。あなたはまだその途中なのだ。

サラ： 自分の内にそれを見出さねばならないのですね。

スワミジ： もっと深く探求する必要がある。体の中には何があるのかね。心がある。心の中には何があるのかね。知性がある。知性の中には何があるのかね。深い眠りの時体はなく、心、知性もない。その時あなたはいるのかね。深い眠りの時、あなたは存在しているのかね、それとも存在していないのかね。

サラ： 両方です。

スワミジ： あなたは存在している。疑っているのかね。深い眠りについていいるとき、あなたは存在しているのかね、それとも存在していないのかね。

サラ： 分かりません。どちらとも言えるような気がして… すべては存在で…

スワミジ： 深い眠りの時あなたは生きているのかね、それとも死んでいるのかね。

サラ： 生きています。

スワミジ： どうしてそう言い切れるのだね。誰かがそう教えてくれたのかね。睡眠中には自分が存在している意識がなかったのに、どうして生きていたと言い切れるのだね。誰かに聞いたのかね、それとも事実なのかね。

ここに存在の神秘がある。深い眠りについていたときのあなた状態があなたの真の人格だ。知性、心、五感、体、家族、友人、敵、お金などではない。これらのものを持たずにしてあなたは存在していた。そのとき存在していたのは何なのか。それがあなたの純粹なる存在としての状態であり、これがあなたの質問に対する答えだ。意識の分析について書いた本をクラウス氏に渡したが、あなたもその本を読みなさい。「[セルフ・リアリゼーション 真の自己実現](#)—その意味と方法」という本だ。

サラ： 「人格」が「氷山の一角」と言われましたが…

スワミジ： 人格とは私が目の前にあるものだ。170cm の高さを持つものが人格だが、あなたの本質はそれとは異なる。本質は普遍的で包括的なものだ。カメラで撮影できるのがあなたの人格だが、あなたの本質は異なる。深い眠りのときのあなたの状態を写真に撮ることはできない。人格とは心と体の複合体、精神物理学的なものだ。

ラリー： 時間というものは存在しないのですか。

スワミジ： 経験の尺度としてあるが、究極的にはそういうことだ。

ラリー： 私たちにとって現在あるいは未来に起きていることも、すでに起きているということですか。時間が相対的であるとすると、私たちに明日起こることは、すでに起きているということですか。

スワミジ： 何百年先に起こることも、すでにどこかで起きている。あなたにとっては将来のことだが。トロイ戦争は、今もどこかの別の世界で起きている。今もどこか別の場所で起きているのだ。そしてまた別の場所ではこれから起きる。宇宙の相対性は人の心にとって神秘だ。現代物理学の相対性理論を学べばその内容に驚かされるだろう。相対性理論が示唆することを理解すれば、心は呆然として何も考えられなくなるだろう。

絶対的な時間というものはない。直線的な時間の経過というものはない。時間は状況、状態、観察者の位置に関係しているため、何が何時起きているとは言えないのだ。



すべてが常に起きている。マハーバーラタの戦いはすでに起きた出来事だが、別の世界ではマハーバーラタの戦いが今起きている。そしてまた、これからマハーバーラタの戦いが起きる世界もあるのだ。

固定された時間に縛られている私たちには、相対的である時間の流動的な動きを理解することができない。私たちは、構成要素の相互関係のなかで相対的に決定づけられるものを理解できない。そのような考えができないのだ。自分が万物とつながり、関係しているとは一瞬たりとも考えることができない。そのような考えが心に浮かんだなら、その後どのように生きていけばよいのか分からなくなるだろう。

よって、私たちはそのような思考を受け入れることができず、ゆるぎない空間と時間の中に存在する一つの局所的な存在として客観世界の中を移動していると思い込んでいるのだ。これが私たちの思考だが事実と反している。事実とは違うものだ。私たちはいつ何時でも、あらゆるものを呼び出すことができる。死んだものでさえ、どこかの世界で生きているからだ。

聞いた話だが、古代どこかで起きた歴史的出来事が起こしたバイブレーションを今日再現することのできる装置を作る試みがされているという。バイブレーションは無くならないため、何百年も前に起きた出来事をテレビを見るように再現できるようになるというのだ。バイブレーションは消滅しないので、ある意味すべての出来事は永遠だと言える。

ラリー： 過去の出来事が起こしたバイブレーションを記録することができるというのですか。

スワミジ： そうだ。テレビ画像もバイブレーションが具現化されたものだ。映像があるのではない。バイブレーションを具現化する仕組みなのだ。同様に、ローマ史やホメロスのイーリアスなどの昔の出来事も今再現することが可能だと言うのだ。信じがたいことだが不可能ではないように思える。

ラリー： 理にかなっていますね。

スワミジ： すべては永遠に存在している。万物は常に遍在する。自分のバイブレーションを同調させることさえできれば、どのようなものでも呼び出すことが可能だ。

ラリー： 私たちの未来はすでに起きているのですか。

スワミジ： 私たちの未来はすでに起きている。過去、現在、未来は一体となった完全体だ。過去、現在、未来が別々にあるのではない。

ラリー： すると私は今、私の人生の最初の日々を過ごしていると同時に、私の人生の最後の日々を過ごしているということですか。

スワミジ： その通り。人生の初め、終わり、あるいは中間と呼んでもよい。始まりもなく終わりもない一連の出来事だ。どこに始まりがあり、どこに終わりがあるのか、そしてどこが中間なのか誰にも分からないのだ。どこに始まりがあり、どこに終わりがあるのか分からない宇宙全体の動きなのだ。

ラリー： 何かを変えるということは絶対に無理なことなのですか。

スワミジ： あなたが持つ時間の概念という観点で変化と呼ぶことはできる。あなたには変化しているように見えるが、最終的には時間を超越した出来事だ。

ラリー： 私の人生で起こるすべての出来事、すべての瞬間、すべての思考、すべての感情がすでに決められているのですか。

スワミジ： すべてだ。すべての瞬間、すべての思考、すべての感情だ。「永遠」という言葉がすべてを表している。永遠には過去も現在も未来もない。あなたが時間のプロセスという観点で何を述べても永遠にとっては無意味なことなのだ。ただそこに在る。すべてが在るのだ。今ここに、すべてを包含する完全性の中にすべてを見ることが出来る。それが永遠という意味だ。しかし、私たちは永遠を考えることができず、時間の中でしか思考できないのだ。私たちはプロセスという観点で思考する。よって、すべてが一つの場所にあるという状態を理解することができない。それはいわゆる幾何学的ではない中心が至る所にあり、周辺がないものなのだ。

ラリー： たった今の私の自己意識は 1990 年 12 月 15 日に存在していると感じています。

スワミジ： あなたの意識は今、体と時間プロセスという観点で考えている。

ラリー： しかし、昨日 12 月 14 日に思考していたときの意識は、今日 12 月 15 日に私が感じている意識と同じですか。

スワミジ： 同一の意識、同じものだ。意識に変わりはないのだが、変化する体につながっているために変化しているように見えるのだ。体のプロセスにつながっているため、意識にも動きがあるように思えるのだが意識に変化はない。

ラリー： しかし、今この瞬間に、私が昨日スワミジとした対話が起きているのですか。私は昨日の記憶を持っているだけです。しかし、昨日起きた出来事は、今どこか別の世界の別の場所で起こっているのでしょうか。

スワミジ： その通りだ。

ラリー： この瞬間にも起きいているのですね。

スワミジ： その通り。別の場所で起きているのだが、「別の」というのはいわゆる時間プロセスの幻想だ。むしろそれは永遠に起きている。ヨーガ・ヴァシスタを読とよい。

ラリー： 「Supreme Yoga」というタイトルの本ですね。

スワミジ： そうだ。今話しているような興味深い内容が多く書かれている。すべてがいたる所で起きており、あなたが昨日経験したことを誰かがどこかで経験している。

ラリー： 別の人ですか。それとも昨日の私ですか。

スワミジ： あなたそして他の人の両方あり得る。そして同じ出来事を未来に誰かが経験することも可能だ。実際、この「誰か」とは異なる時間形式におけるあなた自身なのだ。複雑な「あなた」の外に「他の誰か」は存在しない。

ラリー： 誰か別の人というのは理解できるのですが…

スワミジ： あなたが同じ経験をすることも可能だ。

ラリー： 私が昨日した経験、その経験を再び経験しているということですか。つまり、私は意識のどこかで 12 月 14 日を経験しているのですか。今日は 12 月 15 日です。私は今スワミジと話をしていることを意識しています。昨日は 12 月 14 日で、ほぼ 24 時間前、私は 12 月 14 日にスワミジと話をしていることを意識していました。今あるのは昨日のことについての記憶です。しかし、昨日である 12 月 14 日の出来事は意識の別の場所で今起きているのですか。

スワミジ： その通りだ。別のところで起きている。そしてその出来事は過去ではなく今起きている。あなたにとっては過去のことだが、あなたの別の状態にとっては今のことなのだ。実際、過去というものはなく、現在というものもない。また未来というものもない。すべては相対的だ。過去の出来事が現在、現在の出来事が未来に、未来の出来事が現在に起こることが可能だ。あなたは至る所にいるのだ。

ラリー： すべての瞬間が永遠に存在しているのですか。

スワミジ： その通りだ。

ラリー： すると個人が進化に成功するか失敗するかは、すでに決まっているのですね。

スワミジ： そうだ。

ラリー： そうすると、次の質問は無意味かもしれません。私たちは一両日中にアシラムを出発する予定なので、どのような原則に従ってカナダでの暮らしをすべきか聞こうと思っていました。

スワミジ： 帰国後どのような困難があるのだね。

ラリー： どのような困難に直面するかは分かりません。

スワミジ： 想像することは可能だろう。

ラリー： 仕事の量や、弁護士を続けていくべきかどうか、また子供を何人作るか等の選択があるだろうと思います。

スワミジ： すべての問題は、明日、近い将来、あるいは人生で達成しようとしていることに鑑みて判断しなくてはならない。無意味なことをすべきではない。あなたが弁護士であろうと何であろうと、何のために仕事をしているのかを考えなければならない。あなたは人生で何かを成就しようとしており、その目的に向かって漸進しているのだ。そして、あなたが目指している最終目標に焦点を合わせれば、日々の一步一步が、あなたが成就しようとしている目的に資するもの、目的達成に関与するものなのか、それとも関連性がなく、むしろ障害となるものであるのかが分かる。あなたが成就しようとしているものに鑑みて、あなたが取る日々の行動の価値を考えれば、その行動が適切であるか、そうでないかが分かるはずだ。

最終的に何を達成したいのかね。弁護士であったり、その他様々な活動をしたりしているのだが、その努力、仕事、活動等はいったい何のためかね。活動の背後には目的があり、何かを達成したいと考えているのだ。何を最終的に求めているのかね。人間無意味なことはしない。何か考えがあって行動しているはずだ。あなたの活動は、あなたが求めている目的に寄与する付属的なものであり、目的の成就に資するものであれば必要で価値あるものだと見なされる。すればよい。しかし、目的を見失ってしまったならば、あなたは一步も前進することができなくなる。

ラリー： 人生の目的を決定する最良の方法は何ですか。自分の目的が何なのか定かではありません。

スワミジ： 第一に、生きることが目的だ。誰も死にたくはない。それが第一の目的だ。支障なく生きていくために必要なことをしなくてはならない。これには決まった答えがあるわけではないので、安心して生きていくために必要な生活条件は何なのかを考えて常識的に答えを出せばよい。

次に考慮すべきこと。木や岩のようにただ生きていけばよいのではない。自分の価値観に従って意味のある生き方をしなければならない。あなたは知識を増やすことに価値を置いているかもしれない。知恵を得ることをあなたが求めているのであれば、それを達成するために必要なことをしなくてはならない。

そして次に、良好な健康状態を維持しなくてはならない。体の健康、心の健康、そしてまた社会的な健康を損なうようなことがあってはならない。社会ともうまくやっけていなくてはならない。体とも調和が取れていなくてはならない。心に葛藤があってもいけない。身体健康、心理的健康、社会的健康、そして政治的健康さえもが重要だ。政府と反目してはいけない。これらも、この世界で賢明に生きていくために必要なことだ。

これらの必要性が満たされているとして、最終的にどうなるのか。ここからが大事どころだ。あなたの意識と経験は自己の最も大きな広がり、すなわち神の体験へとつながる人格に成長していくのだ。あなたがこの世界で生きているのはこのためだ。皆がそうしているからといって、飲んで、食べて、寝るためだけに生きているのではない。それが私たちの存在理由ではない。自己のより大きな次元に向かって進み、最終的に絶対なる普遍性に到達するために、建設的で、前向きで、確実に、統合された全体的な視野をもって生きなければならない。これが人生の目的であり、あなたが存在しているのはこの目的のためだ。

裁判所で行う仕事など、あなたの弁護士としての仕事、そしてまた買い物、結婚と子作り等々、これらはすべてあなたが普遍的存在に到達するために不可欠な要素であり、あなたの活動のすべてが、この偉大なる目的に資するものでなくてはならない。あなたは常識や理解に基づく自己の判断によって、日々の活動がどのようにして完全なる自己を築き上げるのかを知らねばならない。このように、日々の生活をしながら正しい方向に進んでいかねばならない。

あなたはカナダに住んでいる孤立した人間ではない。あなたは万物、全世界、すべての時間と空間につながっている。たった今も時空と太陽系はあなたの肌に触れているのだ。あなたはどこか特定の場所に住んでいるのではない。太陽系、この銀河系、この時空、広大な宇宙は、あなたの住処であるばかりか、あなた自身に浸透しているのだ。あなたの体の細胞自体が宇宙織りな素材で作られており、あなたは誰それという一個人ではないのだ。あなたは自分で考えている以上の存在なのだ。このことを常に念頭に置き、日々の活動の指針としなさい。

ラリー： とても大きなメッセージです。自分の存在がどのように宇宙全体とつながっているのか、実際に生活していく中で知ることは難しいと感じます。

スワミジ： この世界から真の保護を求めるならば、この真理を常に意識していなければならぬ。さもなければ、あなたは常に不安を感じるだろう。あなたを守ることができるのは宇宙の力だけだ。単なる机上の議論だと考えてはいけぬ。これは私たちが今必要としている処方薬なのだ。

これは普通の人々の考え方ではないが、私たちはここで普通の人々の考え方をしようとしているのではない。このアシュラムでは思考をより包括的なものにするという、普通とは異なることを目的としている。普通の人間であったなら、そのような志を抱くことはなかっただろう。アシュラムでは普通とは全く異なる考え方をし、世界を新しい視点で見ようとしている。難しいことではない。必要なことであり、明日ではなくたった今しなくてはならないことだ。私たちに明日というものはない。今ここですべきことなのだ。

あなたは、宇宙の力の協力がなければ一瞬たりとも安心することはできない。必ず失望するだろう。この世界で生きていくのは容易ではない。人間があなたを守ることはできない。あなたの人格を構成している宇宙の力のみがあなたを守ることができるのだ。煉瓦で作られた家は、その家を構成する煉瓦によって守られている。家が家を構成する煉

瓦以外のものであるとは考えられない。そして宇宙の構成要素があなたの人格を構成する煉瓦なのだ。一瞬たりともこの事実を理解せずに存在することはできない。

ラリー： 宇宙から私がどれくらいの保護を受けるのかは、すでに決定されているのでしょうか。

スワミジ： 決定されており、あなたの意識はその確信から切り離されてはいけない。あなたの意識がそれを認識していなくてはならない。それが事実だという意識がなくてはならない。無意識な出来事があなたに意識的な恩恵を与えることはない。

ラリー： しかし、私の意識のレベル、すべての思考および感情はすでに決まっているのではないのですか。

スワミジ： それはそれでよい。しかし、あなたの意識がそれを受け入れていなければならない。それを生きなければいけない。あなたが今言っていることが、あなたの生活の一部でなければならない。より大きな人間になっても失うものはないだろう。私はあなたに、より大きな人間になりなさいと言っているのだ。あなたは道を歩いていても、大きな人間、巨人、超人、宇宙の象徴として歩くのだ。大きな喜びではないかね。想像しただけでも気持ちが高ぶるではないか。すべてが良好となる。あなたは力を得、喜びを感じ、加護を受ける。すべてに対して充足感を抱くようになる。もしこのような意識であなたの心が満たされたなら、歓喜のあまりに踊り出すかもしれない。

1990年12月16日

ラリー：なぜ世界は創造されたのですか。

スワミジ：その答えは原因の中にあり、結果の中にはない。結果が原因と一つになれば即座に答えは得られる。結果が答えを持つことはできない。結果は質問しか持てないのだ。答えは結果の出所である原因の洞窟の中に隠されている。結果に答えを求めても、それは自分の肩によじ登ろうとするようなものだ。結果が原因と一つになることによって、ウパニシャッドが「それを知ることですべてを知ることができる」という真理を知ることが出来るのだ。「それを知ることですべてを知ることができる」それとは何なのか。それを知るのだ。それが原因だ。今のあなたは結果でしかない。結果が原因と一つになるとき、すべてが明らかにされる。そのためにヨーガを実践するのだ。真摯に実践するのだ。

ラリー：結果が原因と一つになるとき、結果は本当に原因を理解できるのでしょうか。理解する心が失われてしまわないのでしょうか。

スワミジ：原因を理解するという事ではない。結果が原因となるのだ。つまり全知になるということだ。神の意識になるのだ。

ラリー：それは人間に可能なことなのですか。

スワミジ：そのとき人間はいない。あるのは原因と結果の二つだけだ。人間という呼び名を使いたければそれでもよい。すべての結果は原因に戻らなければならない。可能かどうかという問題ではない。必ずそうならなければならないのだ。他の選択肢はない。すべての結果は原因に戻らなければならないのだ。

ラリー：そうすれば、なぜ結果が生じたのか理解できるのですか。

スワミジ：理解ではない。存在自身になるのだ。それは理解を遙かに超えるものだ。

ラリー：それが自然な進化なのですか。

スワミジ：そのとおりだ。

ラリー：これ以上質問はありません。



スワミジ： 質問がすべて出尽くしたとは素晴らしい。これ以上の偉業はない。（笑）

ラリー： 質問が出尽くしましたから、これからどうすべきか考えなくてはなりません。

スワミジ： すべての質問が出尽くしたので虚無感が生じているのかね。自分を空にすれば、またそれは満たされる。「汝が自身を空にすれば私が汝を満たそう」という偉大な金言がある。あなたが自我をなくすとき、世界が激しい洪水のごとく、あなたを満たすのだ。大海があなたを満たすのだ。今のあなたはそれを阻んでいる。全宇宙が一瞬であなたの中に入ってくるのが可能なのだ。旋風のごとくあなたを占有し、溶かし去るのだ。その日のために準備をしておきなさい。

サラ： 西洋の宗教でも浄化のプロセスを経て高いレベルに到達する人たちがいますが、彼らは依然として神を王やイエスといった人として見ています。神はひとりだとは言いますが、インドの人たちが表現するように、神が普遍的な絶対者だとは言いません。なぜ彼らはそのように考えることができないのでしょうか。

スワミジ： 彼らの心はそのレベルにまでしか到達できていないのだ。心がそれ以上進めないレベルというものがある。心にも進化の段階というものがある。心がどうしても受け入れられないものというものがあるのだ。しかし、永遠にそのような考えをしているわけではない。しばらくはそのような考え方をするが、いずれさらに進化する。世界中の人々が皆同じような考え方をすべきだと考えることはできない。皆が同じことを考えるべきだと思うのかね。それは無理な相談だ。時を異にして生まれてきたのだから考え方も異なる。しかし、いずれ時期が来れば違った考えもするようになる。時間と進化プロセスの問題だ。

進化とは段階的な上昇だ。私たちは鉱物から植物、植物から動物、人間へと上昇してきた。そして人間の段階においても、そのレベルにはさまざまあり、皆が同一レベルにいるわけではないのだ。皆が同じ心理的レベルにいるということはありません。それでは皆が同じ思考をする同じ人間になる。皆異なる心理学的な進化の段階にいるため、そのようなことは不可能だ。

サラ： 私たちは異なる段階からスタートしたという意味ですか。すべてが同時に始まったのではないのですか。

スワミジ： 最初は無機物から始まり、植物になった。植物は神のことを考えないが、木が神を瞑想していないと言って非難することはできない。違うかね。植物も一つのレ

ベルで存在しており、それに問題はない。牛にはあなたが考えているような神を考えることはできないが、牛にそのような要求をすることはできない。牛には牛の物の考え方がある。それが一つのレベル、一つ段階であり、他と比較すべきではない。心はその心のレベルまでしか考えることができない。それを超える考え方をできないのだ。しかし、いずれより広い視野の考え方を出来るようになる時が来る。

**サラ：** なぜまだ岩が存在しているのですか。進化は時間的な順序と関係していますか。

**スワミジ：** 時間的な順番ではなく包括的で普遍的な動きだ。どこかに始まりがあって、どこかに終わりがあるというものではない。宇宙による健全な自己適応だ。

**サラ：** なぜ一部の心は進化することが許されているのですか。

**スワミジ：** 誰かが許しているわけではない。自動的に起こることだ。子供が大人になることを誰かが許しているわけではない。宇宙が自発的に、より高いレベルに変化しているのだ。自動であり誰かがそれを「許している」のではない。誰もそのような役割を担っていない。世界の外には誰もおらず、世界の中で世界により行われていることだ。

**サラ：** たとえばイエスのように高いレベルに到達するとき…

**スワミジ：** それは思考の一つの段階だ。あなたは時間という観点で考えている。物事を時間という観点で考えるとき、そこには大きな隔たりがあるように感じる。だから神が遠い存在に思えるのだ。あなたは時間と空間という観点で考えているため、空間は広く、そこには距離があると感じる。そのような観点で考える心は、神にも距離があると考え、その結果神が遠い存在に思えるのだ。これは一つ概念、段階であるが、神は時間のレベルではなく、永遠の存在だ。

**サラ：** なぜ真理あるいはブラフマンが、このような間違った考えを打ち破らないのですか。なぜ高いレベルにまで到達した人たちの誤解がなくなるのですか。なぜ真理を求める真の求道者から間違った考えがなくなるのですか。

**スワミジ：** 間違った考えもいずれはなくなる。ずっとそのままであることはできない。必ず過ぎ去る。すべてには適切な時というものがある。いずれ克服される時がくる。時間の問題だ。

ラリー： スワミジ、今朝スワミジは結果が原因を知ることはできない。瞑想によって、自己実現によってのみ結果が原因を知ることができると言われました。西洋の宗教の考えは少し違うように思います。たとえばユダヤ教では原因が結果に話したのです。

スワミジ： 原因が結果に話すことはできない。二つの異なるものがなければ話をすることはできない。

ラリー： 原因は原因自身と話すことができるはずですよ。

スワミジ： それらな、なぜ結果と呼ぶのだね。原因が原因と話すのであれば、なぜ結果という言葉の意味もなく持ち出すのかね。あなたは「結果」という言葉を使うことで二元性を生み出している。

ラリー： とはいえ、見かけ上私たちの意識は限定されています。

スワミジ： 「私たち」とは結果でしかない。「あなた」が結果だ。

ラリー： 私が結果ですから、私は無知の状態です。

スワミジ： 「無知」などの言葉を使う必要はない。あなたは自分を原因の外に置いているのだ。それが無知という意味だ。無知とはそれだけだ。自分を原因の外に置いて、そこから原因を「対象」として見ているということだ。

ラリー： 自分を原因の外に置いて…

スワミジ： そうだ。原因の外にいて、原因をあたかも自分の外にある物として見ている。それがあなたの世界だ。あなたが言ってることは、つまりこういうことだ。あなたは原因を外の対象物として投射し、主体として対象物を外から見ているのだが、真実はその逆だ。原因をあなたの対象物と考えることはできない。原因の方が先であり、あなたは後から生じた結果なのだ。このように、あなたは神を対象物と考え、神がどこかに位置する存在だと考えるのだ。これが私たちに起きていることだ。

ラリー： 深い眠り、夢、目が覚めている状態という異なる意識の状態は、意識における差異ではないのですか。

スワミジ： 意識に差異はない。もし意識に差異があったなら、あなたは、あなたに三つの状態があることを知り得ない。それぞれの状態が他の状態と異なり、それらの異なる状態をつなげるものがなくなる。意識に断絶はない。三つの状態においても意識は変化しない。そうでなければ、目が覚めている人は夢を見ている人と、夢を見ている人は深い眠りについていて人と別人になることになる。異なる状態をつなげるものが必要であり、あなたは異なる状態を経験しても、あなたが同一の人間であることを知っている。

ラリー： 瞑想の実践を始めるにあたって、どのような障害に留意すべきですか。

スワミジ： あなた自身の満たされていない欲望、それが障害だ。満たされていない欲望があると、それが障害となって現れるのだ。

ラリー： 欲望を満たしてから前進すべきなのですか。

スワミジ： 場合によって、欲望を満たすあるいは満たさないことで対処しなければならない。対処の仕方は状況による。いずれにせよ欲望があってはいけない。欲望が障害となるのだ。

ラリー： 欲望には際限がないのではないのでしょうか。

スワミジ： なぜ欲望が生じるのかを理解していれば、欲望はすぐなくなる。欲望が生じた原因を理解していれば欲望を絶つのにそれほど時間は必要ない。欲望の原因を究明するのだ。なぜ欲望が生じるかが分かれば、どのように取り組めばよいかも分かる。欲望は誤認によって生じる。なにかを本当に欲しているのではない。いずれにしても、注意して対処することが可能だ。小さな欲望は満たせばよい。大きな欲望も霊的な健康に害を及ぼさないものであれば満たすことができる。

また、今生で満たすことのできない欲望もある。たとえば世界に君臨する王になりたいと願っても実現できる可能性はない。実業界の大物になりたいという願望も不可能なことではないかもしれないが、実現できる可能性はわずかであり、そのようなことを求めることが障害となり得る。そのような欲望は抱くべきではない。願望は合理的な限度内のものであるべきだ。無理のない範囲内であれば欲望を満たしてもよいだろう。

だが問題なのは、欲望を満たすと再び同じことを繰り返したいと思うようになる。欲望を満たしても欲望はなくなるしないのだ。それどころか、欲望を満たすことで心に習慣が

形成されて、より激しい欲望となることさえある。満たされたことで消滅する欲望もあるが、欲望を満たしたことで得られた喜びのために繰り返される欲望もある。

欲望にも様々ある。すべての欲望が同じ種類やタイプというわけではない。自分にどのような欲望があるのか知る必要がある。快適な生活を送るための欲求の他にどのような欲望があるかね。快適な生活を求める欲望は大した問題ではない。衣食住は私達が必要とする最低限のニーズだ。これらが障害となることはない。これらとは別に我欲から生じる欲望がある。

しかし、なぜ今そのような心配をするのだね。今は何かの障害があるわけではない。何かの障害に今直面しているわけではないのだろう。障害が生じたら対処すればよい。なぜ今から心配するのだね。

ラリー： リシケシにいる間は問題ありません。しかし、トロントに戻ると全く別の世界が待っています。

スワミジ： 仕事の一つの障害となることもある。仕事が忙しくて一人になれる時間が限られてしまうかもしれない。これは誰にも生じる可能性のある一般的な問題だ。仕事による疲れのために、瞑想しようという気持ちになれないかもしれない。これも問題ではあるが大きな問題ではないだろう。調整可能なことだ。

最大の障害は別のところにある。心が神のこと自体を考えることができないのだ。それが真の障害だ。心が神についての考えを受け入れることができないのだ。障害は外の世界や他人から生じるのではない。障害の原因は心にある。結局心が「私には受け入れられない」と言うのだ。

したがって、毎日これについて考え、瞑想する時間を持たなくてはならない。瞑想を数日怠れば、また同じ思考に戻ってしまうからだ。抽象的な思考が難しい場合は、高尚な思考を維持するために経典を読むなどするとよい。このような思考を絶え間なく継続し続けるのは難しい。修行には長い年月を要する。聖者であっても 24 時間このような思考をし続けることはできない。よって非常に慎重であらねばならない。

心に疑念が生じるのだ。疑念こそが最大の障害だ。「なぜこのような状態なのだろう！私は間違った道歩んでいるのだ。何かがおかしい」。あるいは、「私には無理なことなのだ」、「いったい何の利益があるというのか」。このような疑念が心に浮かんだりする。しかも、今ではなく 10 年後に生じるかもしれない。なぜこのような疑念が生じ

のかと不思議に思うかもしれないが、心は待ち伏せしているのだ。「思い知らせてやる。なぜこのように苦しめるのだ。今は黙っているが、そのうち見ている」。(笑)そして何年も経ってから不意を突き、あなたを道から逸れさせるのだ。だから、あなたは良い人たちと交わり、良い本を読み、良い習慣を身につけなければならない。

最終的には、神についての正しい考えを心に維持することができないことが唯一の障害だ。その他の障害はすべて小さなものであり、この唯一の障害さえ生じなければ対処できるものだ。その他の障害は大した問題ではないと言ってもよいだろう。今この問題についてこれほど議論しているということ自体が疑念が払拭されていないことの証だ。完全になくなっていないのだ。疑念の雲がたれ込めている。薄雲かもしれないが、後にそれが厚い雲に変わるかもしれない。

「なぜ」という疑念が心から払拭されていないのだ。「いったい自分はどうなるのか。何を追い求めているというのだろうか。幻影を見ているのではないのか」。したがって高潔で真摯な人たちとの交わりを持つのだ。少なくとも経典を読むなど、何かが必要だ。人生を通して神の意識を持ち続けることができる人はいない。

ラリー： 神の意識を維持することができないのもプロセスの一部ではないのですか。

スワミジ： プロセスだとしたら、あなたにどのような利益があるというのだね。それがプロセスの一部だと知っても、あなたにとって何もよいことはない。神の意識を維持できなくなったあなたは、以前の状態に戻ってしまうのだ。そのときあなたは、それがプロセスの一部であるということが分からない。プロセスの一部であるというのも一種の理解だからだ。神の意識を維持できなくなったあなたが、そのようなことを口にはしない。混乱した意識のために、すべてを失ってしまうかもしれないのだ。

神の実現が人生における唯一の目的であるという崇高な考えをもつ者でさえ、人生の終わりが近づくと、世界の精神性を向上させるための組織を創設し、自分には人類を救済する預言者としての義務があるのだと思い始めたりする。「世界は窮地に立っている。私が救済せねばならない」と。人生の終わりにこのような考えが生じ、神を求める求道心がなくなってしまうことがあるのだ。

悪魔はさまざまな姿でやって来る。「多くの人たちが苦しんでいるのに、なぜ神を求めるのだ。愚か者め」と悪魔はあなたの耳に囁くかもしれない。あなたはそれに納得して、「それも一理ある。私一人が神を求めるのではなく、家族も一緒に連れて行けばよい。

世界の人々のことも考えるべきだ。私はなんと利己的なのだろう！まったくその通りだ。世界平和のために働こう。大きな舟で皆を神に導くのだ」と考えるのだ。

この考えの何が間違っているのか。分別があり、理にかなった考えに思えるかもしれない。非常に馬鹿げた考えなのだが、とても合理的に思える。「多くの人が苦しんでいるというのに自分だけ神に到達しようとするのか。利己的だとは思わないのか」。不安定な感情によって神の意識が圧倒されたのだ。

これはかなり高度なレベルに達した人たちに起こることなので、あなたに世界を救済せねばという考えは起こらないかもしれない。あなたはこれから修行を始めようとしている段階だから、このような考えは生じないだろう。自分が人類を救済するために生まれてきた預言者だと考えることはないだろうが、そのような可能性は皆無ではない。この世界はとてもリアルで、周りの人々は重要であり、歴史上の出来事は非常に意義深く感じるために、自分が上りつめたと信じている境地から、最も低いレベルへと引き戻されるのだ。これらが一般的に考えられる障害だ。

**サラ：** 神に到達した者が、どうやって低いレベルに落ちるのですか。

**スワミジ：** そのような人は神の実現に到達していないのだ。神の実現についての概念を持っているだけで、実体験に至っていない。心は巧みに私たちを欺く。心はずる賢く、私たちにどのように対処すればよいかを知っている。よって指導者が必要なのだ。

ときどき指導者に指示を仰ぐことが必要だ。何かの経験をしたら、「このような経験をしました」と相談するのだ。常にすべてを自分一人でしようとしてはいけない。時々自分の経験をチェックする必要があるが、指導者なしでは難しい。間違った瞑想をしてしまうこともある。（ダルシャンに来ていた他の男性を指して）この男性のように、眉間に意識を集中させて瞑想したら夜眠れなくなったというようなことが起こるのだ。このような間違いは実にたくさんあり、どの段階においても、カメレオンのように色を変え形を変えて現れる問題に気をつけていなければならない。

1990年12月17日

ラリー： ご挨拶に来ました。

スワミジ： 出発かね。

ラリー： 一点だけ確認させてください。スワミジは普遍的存在、絶対的存在に痛みや苦しみというものはない。絶対的存在は自身の分割できない単一性を感じるだけだと言われました。

スワミジ： 無限が有限にならないかぎり痛みや苦しみというものは存在しない。外の環境の影響を受けるのは有限な存在だけだ。無限なる存在に外はなく、したがって痛みや苦しみというものもない。そのようなものは存在しないのだ。苦しみや喜びは外的状況があなたに与える影響であり、外的状況がない無限なる存在にそのような問題は生じない。

ラリー： 実際にはないものが、あるように見えるだけということですか。

スワミジ： それは有限なものにだけ当てはまるものだ。無限なるものにそのような「感情」はない。感情は一切ないのだ。ただ存在している、それだけだ。

ハリオーム・タット・サット